

太宰治著述一覽稿(Ⅺ)

— 昭和二十三年自一月至五月 —

山内 祥史

犯人・中央公論・新年号、第六十三年第一号、第七百七号・昭和二十三年一月一日発行・65頁・「小説」欄

『櫻桃』（実業之日本社、昭和二十三年七月一日発行）に、全文収載された。

『太宰治全集第十五卷人間失格』（八雲書店、昭和二十四年十二月十日発行）に、全文収載された。

〔同時代評〕 平野謙「翫賞家失格（文芸時評）―『不連続殺人事件』その他」（『文芸』第五卷第五号、昭和二十三年五月一日発行）には、つぎのように記されている。

私は戦後の文学世代が伝統の断絶に力を傾注してゐる志向をやはり私なりに肯定したい。実生活と文学との関連において、連続、不連続の問題をドストエフスキイからモツアルトに検証してきた小林秀雄の批評的志向についても改めて考へなほしたい。いまや不連続殺人の文学的な意味賦與をわれ人ともに試むべきではないか。しかし、誤解しないでほしい、私はそのやうな視点のゆゑに最近の小説がやたらに人を殺したがる傾向を安易に肯定するものではない。椎名の『深尾正治の手記』もその例外ではないが、高見順の『真相』、太宰治の『犯人』、丹羽文雄の『守礼の門』をはじめとして、今日でも那須国男は二人も

殺し、野口富士男でさへ殺人未遂事件に取材してゐる。この傾向はまだまだ続くだらうが、不連続の連続がこの程度の文学的表現しか持ち得ないことにやはり私は反対したい。すべてデモーニッシュなフォルムに缺けてゐて、現実生活の血なまぐささに「立ち遅れ」てゐる。

武田泰淳「無感覚なボタン」（『文芸時代』第一卷第五号、昭和二十三年五月一日発行）には、つぎのように記されている。

（帝銀毒殺事件が発表されてまもなく、私は太宰治氏の「犯人」を読んだ。そしてその軽妙な筆のもとにをどる善意の青年の、おろかしさが、必死な犯行と、その少しく悲壮な、少しくみじめな最期に感心しつつも、小説「犯人」の古風さを、おぼえぬわけにはいかなかった。それは帝銀事件の暗示する、犯人の無感覚、そしてそれにもともなふ現代の無感覚が、この小説にはなく、しかも現実には充滿してくる予感が、私に迫つてゐたからであらうか）

志賀直哉、佐々木基一、中村真一郎「座談会・作家の態度（一）―志賀直哉氏をかこんで―」（『文芸』第五卷第六号、昭和二十三年六月一日発行）には、つぎのように記されている。

編集部 「中央公論」新年号の「犯人」は？：／佐々木 あれは愚作だったな。／志賀 あれは読んだ。あれはひどいな。あれは初めから落ちが判つてゐるんだ。こちらが知つてゐることを作者が知らないと思つて、一生懸命書いてゐる。／佐々木 匿してやつてゐるわけですね。／志賀 これは芥川君にもあの人の「奉教人の死」だつたか、さういふ小説に就いて言つたことがあるんだけど、僕の「子を盗む話」でも、それから「邦子」なんていふ小説の場合でも、事件の結果を一番先き

へ書いて了ふ。仕舞ひにそこまで話がゆくといふ事を読者に知らして置く。そしてその道程を丹念に書いて行く。僕の好みかも知れないが、一生懸命に書いてゐる事を、どうなるんだらうといふ事件の興味だけで読まれるのは厭やだと思ふ。夢を書く場合でも、初めから夢だと言つて了ふ方がいいね。／編集部　ふつうに小説が面白いといふときは、その逆ですね。／志賀　通俗小説はそれでいいかも知れないけど、やっぱり、読者を甘く見る事だらうね。それから小説は一遍だけ読むものか、二度読むものか。自分が作る時は読み返して丁寧に書いてるんだからね、やつぱり二度目は興味が非常に違ふといふやうなものを書くことは、詰らないね。／佐々木　しかし、よつぽと強い人でないと、さういふふうに出来ない所があるんですね。太宰なんかでも、どこか芯の弱いやうな所があつて……。／志賀　太宰君のポーズは、弱い所から来てるね。／佐々木　ええ。／志賀　まともにゆくよか、ちよつと横へ身を避けてゐないと、不安だといふやうな……。／佐々木　ええ。それと非常に見栄坊のところ……。／志賀　だから、当人とすればそのことにも言ひ訳があるかも知れないけどね、しかし読まされるほうは、愉快でないからね。／佐々木　わざとやつてるのではないんでせうきつと。いは、あ、いふ逆説的なスタイルやポーズを取ることによつてしか、レアリティを出すことが出来ない、つまり、正攻法で押して行けるだけの自我の実体が稀薄になつてゐるといふ時代的宿命を負つた作家のやうな気がします。然しあれで、太宰はだんだんまともな行き方を取るやうになりつゝ、あるやうにも思はれます。／志賀　さうかね。／中村　つまり、まともからもやれる、わきからもやれる、

しかし自分はわきを選んだ、さういふことではないんでせう。／志賀　それは実生活でもさういふのがあるね。だけでも、どうもそいつはあんまり珍重すべきことではないな。／佐々木　ええ。

〔付記〕「プウシキン（吹雪）」の一節が、エピソードとして掲げられてゐる。初出誌は、「昭和二十二年十二月廿五日印刷」「編集人山本英吉」「発行人栗本和夫」「発行所／東京都千代田区丸ビル五階／中央公論社」であり、「小説」としては太宰治「犯人」だけが掲げられている。

響應夫人・光 CLARTE・新年特大号、第四卷第一号・昭和二十三年一月一日発行・36頁・39頁・「小説」欄

『桜桃』（実業之日本社、昭和二十三年七月二十五日発行）に、全文収載された。

『太宰治全集第十三卷ヴィヨンの妻』（八雲書店、昭和二十四年四月三十日発行）に、全文収載された。

〔付記〕初出誌は、「昭和二十二年十二月十五日印刷納本」「編集人加藤一夫」「発行人茂木茂」「発行所／東京都文京区音羽町三ノ十九／株式会社光文社」で、「小説」欄には、太宰治「響應夫人」、井上友一郎「君死にたまふこと勿れ」、里見弴「心の營養失調」の諸作が掲載されている。なお、表紙には「創作・太宰治 井上友一郎 里見弴」とある。

酒の追憶・地上・新年号、第二卷第一号・昭和二十三年一月一日発行・58頁・64頁・「創作」欄

『桜桃』（実業之日本社、昭和二十三年七月二十五日発行）に、全文収載された。

『太宰治全集第十三卷ヴィヨンの妻』（八雲書店、昭和二十四年四月

三十日発行)に、全文収載された。

〔付記〕 初出末尾には、「(本稿は旧かなづかいによる)」とある。また、

初出誌は、「昭和二十二年十二月二十日印刷納本」「編集兼発行印刷人

小池一二三」「発行所／東京都千代田区代官町一／家の光協会」で、

表紙には「地上/GOOD EARTH」目次には「★創作★酒の追憶」:

…太宰治」とあり、「創作」欄には太宰治「酒の追憶」だけが掲げられて

かくめい・ろまねすく・新年号、第一巻第一号・昭和二十三年一月一日

発行・34頁・「獨語」欄

『如是我聞』(新潮社、昭和二十三年十一月十日発行)に、全文収載された。

『太宰治全集第十六巻もの思ふ葦(近代文庫23)』(創芸社、昭和二十七年七月一日発行)に、全文収載された。

〔付記〕 初出誌「編輯後記」には、つぎのような記述が見られる。

「独語」欄の諸氏は「ろまねすく同人」としてこの雑誌の趣旨を強力に推進する中心となつて下さつた。頼もしく、難有いことだ

初出誌は、「昭和二十二年十二月二十五日印刷」「編集者本多高明」

「発行者林正篤」「発行所東京都中央区日本橋江戸橋一ノ四／ろまねすく社」で、表紙には「ろまねすく/ROMANESQUE」とある。な

お、「独語」欄には、辰野隆、太宰治、林房雄、寒川光太郎、船山馨、田村泰次郎、井上友一郎、伊藤整、坂口安吾の諸稿が掲げられている。

美男子と煙草・日本小説・三月号、第二巻第三号・昭和二十三年三月一

日発行・4〜7頁

『桜桃』(実業之日本社、昭和二十三年七月二十五日発行)に、全文収載された。

『太宰治全集第十五巻人間失格』(八雲書店、昭和二十四年十二月十日発行)に、全文収載された。

〔付記〕 初出誌は、「昭和廿三年二月二十日印刷納本」「編輯人和田芳恵」

「発行人羽田潔」「発行所／東京都中央区日本橋小網町二ノ二／株式会社日本小説社」で、同誌には、太宰治「美男子と煙草」、北原武夫「情

炎」、中村汀女「春の星」、近松秋江「青草」、坂口安吾「不連続殺人事件」、林芙美子「酒眼鏡―放浪記第三部」などの諸作が掲げられている。

眉山・小説新潮・三月号、第二巻第三号・昭和二十三年三月一日発行・

6〜11頁

『桜桃』(実業之日本社、昭和二十三年七月二十五日発行)に、全文収載された。

『現代小説代表作選集3』(大元社、昭和二十三年十二月二十五日発行)に、全文収載された。

『太宰治全集第十五巻人間失格』(八雲書店、昭和二十四年十二月十日発行)に、全文収載された。

〔同時代評〕 福西英三「らんであるヴゅ・いまちねえる」(「北溟」第一号、昭和二十三年七月一日発行)には、つぎのように記されている。

「僕、本を読む事にかけては、相当忍耐力があるんです」／「最も愚劣な、時間の浪費だね。面白くないのは途中で止めるべきだ」／「じゃあ、太宰さんの『犯人』みたいなものを読めつて言うんですか? 太

宰さん、あれは初めからオチがわかつてしまふ作品ですよ。アルチス「ト宰の計算違いだ。でも『眉山』は面白かったですよ、芸術の香りも高き落語。——」でも題名がと言ひかけて、あわて、口を喰んだ。

題名が陰惨だと言おうとしたのであるけれども、眉山は言う迄もなく明治の作家。明治四十一年六月十五日、一片の遺書も残さず、自殺した。その眉山が題名なのである。その時、不吉な予感とも言うような暗い影が、ふと私の胸をかすめたのである。題名の事、言つてはいけない。私はヤケに煙草を喫つた。

淡谷悠蔵「小説時評」(「東北会議」第二卷第三号、昭和二十三年七月十五日発行)には、つぎのように記されている。

太宰治の「眉山」／太宰治がこうなる前に、この時評は書かるべきものであつた。本人の意志を以て、自らの生命を断つた時のシヨツクは、本人の意志に関りなく死が訪れた時のそれと比べて何が故にこうも大きいのか。しかも太宰の一連の作品、所謂太宰文学の、特に最近の傑作だと云われた「斜陽」などに見て、文学を通して彼の生活の方向が正に「斜陽」であつたことは、忠実な読者には既に解つて居た筈なのに——。／葛西善藏の文学にも、「生活の壁」があつた。どうにもならぬ境涯につきあてて、もがき苦しむ乍ら、そこに渾然たる芸術をつくり上げ、しかもその芸術の為に益々深刻な苦しみを苦しんだ彼にも、一歩つき込めば玉川上水に身を浮べる素質があつた。だが、そこには大正末期と、昭和年代、敗戦日本の社会相の差違があり、葛西善藏と太宰の生活の距離があつた。／太宰文学は自虐の文学だという、自虐は鋭い良心を母胎とする。もつと美しい、もつと美しい、もつと

美しい人生を求め、社会にも時代にも、酒にも女にも、己れ自身にも絶望したところに、あゝ、惨として自虐が生れる。玉川上水の死にしても、近松の持つ心中情緒では絶対にあり得ない、自ら選んだその方法にさえ彼は吐き気を催していたに違ない。／小説新潮、三月号の「眉山」の中の、トシちゃん、新宿の帝都座の裏の若松屋という飲食店の女中である。小説というものがメシよりも好きだが、禿げ頭の洋画家、二科の橋田新一郎氏を「林美美子さん」と紹介されて「林先生つて男の方なの？」といぶかり乍ら「高濱虚子というおぢいさんもあるし、川端龍子という口髭をはやした立派な紳士もいる」と云われて、その儘、信じ込んで了うような娘だ。お客の名を一々うるさくききたがる癖にピアノリストの川上六郎氏を、川上眉山だと思ひ込む文学的時代感覚の持ち主だ。以来彼女には「眉山」というあだ名がつき、若松屋を眉山軒などとよぶ人も出て来た。貴族で、大きな家で育つたというが、実は小学校の小使の娘で、貴婦人はおしつこをする時しやがまないものだというのを真に受けて、御不浄を海にしたり、無智で、イクザクトリイで、うるさくて、フウルで……作者はこのトシちゃんに先ずあらん限りの侮蔑と嫌悪悪罵を浴せかける。ところがそのトシちゃんやんが腎臓結核で手術も何も手おくれで、永いことがないというので父親のところへ帰されたことを知る、と今までのことが何も彼も階段を下る時のダダ、という急調子も、あわてて便所へとび込んで、戸をぴしやつとしめるのも、貴族の立小便の真相も、その病気の為のおしつこの近さからとうなづけて、午前二時でも三時でも起きてお酒を持つて来て呉れたすなおな気性が可哀相になつて「他へ行きましょ

う。あそこでは飲めない。」太宰にも醜いえげつないものの底から人間のよさがきらめきのほるのがわかり始めて来た。こうしたものもつとぐんぐんとびて行つたら、最早太宰文学ではなくなるだろうが、新しい境地がひらけたであろう。だが、斜陽は翌の日の朝を迎えなかつた。／山崎富榮の父親が、妻子ある男と抱き合つて浮んで居る娘の姿を、小雨降る青草の堤に立つてじつと見つめて居る姿、足駄を穿きズボンの裾をまくり上げ、傘をさして立つて居るその姿を、太宰治よ、霊あらば永く自虐のうちに喪失した人の子の涙が、ジクジクと、酒にあれた両頬に下るであろう。／それは書かれざる君の最後の傑作であろう。

〔付記〕 初出誌では、標題の下に「太宰治／向井潤吉画」とある。また、初出誌は、「昭和二十三年二月二十七日印刷納本」「編集兼発行者／東京都新宿区矢来町七一／株式会社新潮社」であり、同誌には、中山義秀「残照」、太宰治「眉山」、北條秀司「初日」、邦枝完二「橘や」、石坂洋次郎「石中先生行状記」、舟橋聖一「雪夫人絵図」等の諸作が掲げられている。

如是我聞・新潮・三月号、第四十五卷第三号・昭和二十三年三月一日発行・60頁63頁

『如是我聞』（新潮社、昭和二十三年十一月十日発行）に、全文収載された。

『太宰治全集第十六巻もの思ふ葦（近代文庫25）』（創芸社、昭和二十七年七月一日発行）に、全文収載された。

〔同時代評〕 文学行動同人「志賀直哉広津和郎両氏を囲んで」（文学行

動）第二号、昭和二十三年一月一日発行）には、つぎのように記されている。

吉岡 太宰治はどうです。／志賀氏 年の若い人には好いだろうが僕は嫌いだ、とばけて居るね、あのポーズが好きになれない。

野平健一「如是我聞と太宰治」（「新潮」第四十五卷第六号、昭和二十三年六月一日発行）には、つぎのように記されている。

「如是我聞」は、「新潮」が、板のやうに薄い太宰治の胸を金槌でなで、塩辛とんぼの尾の如く細い腕をヤットコでおびやかす態そのまゝ、無理無體、ねばねばしつこく喰ひついて、宛然「命ずる」が如き有様で書かせたのであるから、無茶も度が過ぎるぞ、屋形舟に大根積ませるやうなことは止める、太宰治の才を殺し、いびる者は、かの「新潮」の貪婪強欲作家いぢめ猫かぶり狐狸の智慧で、最下等のジャアナリズムである、太宰には、たゞ小説を書かせれば、それが気品もつた雑誌道だ、と、この巷間流説は、はつきり言ひます、巷間人の無感覺、無理解、乃至嘘である。／「如是我聞」は太宰氏がいやいやではなく、みづから選まれた一個の果実であつた。だれの口添でもない、聲援でもない、氏みづからの魂である。／死人に口なし——俗言がかなしい。さればこそ私は、細心の注意を払つて、情による事実の歪曲を防ぎ、我れと我が心に、落着けと一言、命じつ、書くつもりである。／「如是我聞」の第一回（本誌三月号）を書かれたとき、氏は、その数日前の約束あつたにもかゝらず、一度はすねて、書くことを、ためらはれた。そのとき私は、僭越ながら氏の、ためらひの理由はよくわかつてあるつもりであつた。さうして、先生も、「さうだ、さうだおまへ

の想像通り。もう一寸待て。」と、軽く笑つた目顔で書きたくないの
ではない、書かうと思つて最初の一句、喉まで出か、つたその瞬間、
出鼻をぐじく見事な一事が、傍の女性（いま有名）の口をついて出た
のである。／「ノヒラさん、先生が可哀さうだと思つたら、あきらめ
なさいよ、死んでしまふわよ。」／彼女の目は、先生を見てゐたのでは
ない、見てゐたのは針の糸目であつた。／先生は、にはかに、はにか
み、ふつと口をつぐんだ。けれども直ちに氣を取り直して、口元は、
もう一度、枕の言葉であるへかけたのを、彼女はさらに盲目の追ひ打
ち。／「書きたくないものを、無理にせめては、だめよ。」／己が意に
反して、ひとの心を迎へるにもとより敏な氏は、／「さうだ、さうだ、
書きたくないものを書くのは不健康。いのち取り。いのち取り。」／ふ
るへた口元をついて出た句は、似ても似つかぬ意想外のものになつて
しまひ、氏御自身酒をさつとあふらぬわけには行かぬ。／先生の心は、
フザケて曰く「面には快樂よそほひ、心にはなやみわずらふ。」先生
は書きたいのだ。／先生の知慧はひろく、機を見て、美味の食欲をふ
るひ起し、傍のいまは名ある女性に用事云ひつけ、買物に出し、留守
中ねらつて、さうして「如是我聞」は始まつた。所詮、先生は書きた
かつたのであつた。書かずには、ゐられなかつたのである。／（中略）
／熱海から手紙をいたゞいた。二回目の「如是我聞」の連絡に、帰京
の日を知らせて下すつたのである。さうして、「酒をつ、しんで、大
変元氣になりました」と、嘘が書いてあつた。「また二人だけでやり
ませう。」私は、二日間、終日膝を屈してゐる苦痛がよみがへつてきた。
追伸に、「この手紙は大切な手紙ですから、保存して置いて下さい。」

とあつたが、どういふ意味か、私には、いまでも判らぬ。／二回目は、
容易に始まつたのであるが、たちまち千客萬来、挫折も容易であつた。
／（中略）／「如是我聞」三回目は「人間失格」を書き終つて、「グッ
ド・バイ」を始めるまで、その間、三日、その後は、待つてゐる筆の
原稿料をお届けに行つても会へなかつた。ひとを避け始めた。女は刺
も通じてくれなかつた。お宅へ行き奥さんにお渡しして帰つた。／六月
四日、都合で、私は帰宅が夜九時になつた。太宰さんから電報である。
スグ ジタクへ オイデコフ ダザイ／五時過ぎての発信である。私
はぎくりとした。これは、なにかの変事、と思ひ、何かの御用にも、
と考へて私は、女房同道、急いだ。或ひは、太宰治の死？／玄関を開
けたら、鼻をつく、線香のほひ、これはいよいよ、と思つたら太宰
さんが出てこられて、ほつとした。にほひは蚊取線香だつたのである。
私はどうかしてゐる。／太宰さんはいまから「如是我聞」を書かう、
と言はれる。最近の「新潮」にとつて、この日、七月号の原稿が頂け
るなら、破格の早さである。／太宰さんは、しきりに、本箱をがだが
た言はせ、あの本この本、ひつくりかへして、何かを探してゐたが、
ないらしく、／「おい、志賀チヨクサイの本はなかつたかね。何かあ
るだらう。」／奥さんも一緒になつて、かなり長い間、かきまはして
をられたがたうとう見つからず、／「縁がないんだねえ。まあいい。」
それから、夜更けて家を出、仕事部屋の前にくると、私の女房に向ひ、
／「奥さん、今晚一晩だけ、ご主人をお借りしますよ。」／仕事は徹
夜で、はかどつた。／「きみが、句点の調子や、文章のくせをよくお
ぼえてくれたので、とても早く、進んだね。」／太宰さんは、疲れや

すめの酒といつて、私にもついでくれ、女もゐない二人で、しずかに飲みながら、雑談をしてゐた。

斎藤十一「編集後記」(「新潮」第四十五卷第六号、昭和二十三年六月一日発行)には、つぎのように記している。

「如是我聞と太宰治」を書いた野平健一君は本誌の編集部員であるが、同君は生前太宰氏に最も愛顧を蒙つた人で、「斜陽も野平君のために書いた」と太宰氏も言つてゐたほどである。日頃の言動のほうが、その作品よりもはるかに面白い場合の多い太宰氏にあつては、このやうな身辺的な記録も、氏を知るためにはかなり重要な意味を持つと思はれたので、死体搜索や葬儀のため、殆ど連日徹夜を続ける野平君を激励して書いてもらつた。／＼「如是我聞」は太宰氏としては殆どはじめて書いたエッセーであり、必死のプロテストとして各方面に非常な反響を呼んでゐるが、これがいかに多くの犠牲を覚悟して書かれたものであるか、野平君の一文がよくその間の事情を物語つてゐると思ふ。なほ本稿の続篇(四)は既に脱稿してあるので、これに関するノートと共に近く誌上に発表するつもりである。

中野好夫「如是我觀」(「朝日新聞」第二三三七八号、昭和二十三年六月二十一日発行)には、つぎのように記されている。

人間の死について、ぼくはあまり語りたくない。かりにぼく自身があゝ、いつたことになつた場合などを想像するとなおさらいやだ。もし太宰氏の場合たつた一つの誤算があつたとすれば、それはこの自分の死後の騒ぎを計算の中に入れていなかつたらしいことであらう。おそらくその予想は死ぬことさえイヤにならせたに相違ないからである。

／＼それにぼくは故人とはついに一面識もなかつた。強いて求めれば機会はないでもなかつたが、とくに会つてみたい興味もないまゝに、ついそのまゝになつてしまつた。死因については、いろんな人がいろんな想像をたくましくしているようだが、もちろんぼくなどにはわからない。強いて興味もない。人間というものは、想像以上の苦しみがあつても死なない場合もあれば、案外他愛もないことで簡単に死ぬこともあるのだ。死そのものは必ずしもその人の苦惱の計尺にはならない。しかしたゞ一つ言ひうることは、理由はとにかく、ほんとに生きることがいやになつた人には、静かに死なせてあげることが礼節であらう。たゞし静かに、それが絶対の要件だ。／＼死につかれた人間——なにかさういつたものが、太宰氏には以前からその文学にまでにじんできた印象であつた。昨年末ごろだつたか、ぼくはちよつと太宰氏の文学にふれた序でに、この作家などこそ戦争から戦後への激動をもつとも鋭敏なふるえるアンテナの穂先で感じつゞけてきた魂ではないだらうかと書いたが、宿命的な個人的資質は別としても、さぞかし生きるに苦しい十年間であつたらうと思える。／＼大正末の有島武郎、昭和初年の芥川龍之介、そして今度と、同じ作家の死にしてもそれぞれにはつきりと世代の差別があらわれているのはおそろしい。あのおののくような不安定の上にハカなくも美しいバランスをつくり出していたユニークな文学といい、さらにいろいろ伝えられる死の前後の事情といふ、なんとしてもこれほど戦後世代という一つの心象風景をはつきり示したものはないように思う。おまけにハシタないジャーナリズムの大騒ぎが、なにか一マツの喜劇じみたものまでも彼の死につけ添えたのは

気の毒であった。ぼくなどはちがつて、故人のもつとも共鳴的な読者層をなしていたという若い人たちにとつては、また自から別な大きなショックであつたかもしれない。頭ではどうやら理解できないこともない。だがそれはもはやぼくなどには心ではついにわからない遠い世界のことになつてしまつたのもやむをえない。／＼ぼく自身も、彼には最近の文章で行きがけの夕賃に一太刀やられた形である。だが、太宰君よ、死んでしまつては君の負けだ。そしてまた同時に君の勝ちである。君の文学について語るには、またおのずから曰もあろう。死にしものをして死にしものを葬らしめよ。「あとは沈黙」(ザ・レスト・イズ・サイレンス)である。

中野重治「太宰の死について」(「文学新聞」第十七号、昭和二十三年七月一日発行)には、つぎのように記されている。

太宰が死んだと新聞に出たときわたしは必ずしも信じなかつた。しかし死が出、ともいはずみ、本当に死んだことになつた。やはり太宰は自分の芸術を尊重することが足りなかつた。文学者としての自尊心が十分大きくなかつたと思う。／＼死ぬ前に太宰は論争をしている中野好夫、渡辺一夫などを反駁し、志賀直哉を反駁しているが、それを見ると、そこに闘志のたましいが欠けている。相手を反駁しながらその相手に自分をみとめてほしいという弱気な下心をあらわしている、のみならずこの弱気な下心そのものすら認めてほしいという気持ちを出している。相手とたたかうならば相手を死なせねばならない。論争の副産物として、相手が首をくくるというようなどころまで相手を追いこめねばならない。相手にはちよつと傷つけ、自分は傷をしな

いですまそうというような態度は論争者のものといえぬ。つまり文学者のものといえぬ。

中島健蔵「太宰よ、さようなら」(「人間」第三卷第七号、昭和二十三年七月一日発行)には、つぎのように記されている。

戦争のころ、わたくしは、ふしぎに彼が落ちつき出したような感じをもつた。もちろん酒をのめば、すぐに彼らしく亂れたが、手のつけようがないほど没落した世相の中で、かえつて安住に近いものを感じ、いらいらした気分がいくらかうすらいだのではないかとさえ思つた。太宰は、東京に殺された。もしも彼が上京しないで、津軽にしばらく落ちついていたら、もちろん自殺などはしなかつたであらう。東京は、希望と絶望と、闘争と没落と、そして、いらいらした無関心と、あせりぬいた政治とが、まざまざとこんがらがつている町である。丸の内だろうと、下連雀だろうと、同じことである。これはもはや単なる没落ではない。もちろん、単なる希望でもない。その間に板ばさみになれば、自己の没落のほかに道がないようなへんな町である。戦後の東京の恐しさは、太宰の自殺によつてもよくわかる。／＼太宰は、この恐しさに敗けはじめていた。肉体の危機がそれに加わつて来た。血を吐いたそうである。気が弱くて、どこにも安住できなかつた彼は、またいらいらしはじめた。『如是我聞』という論文は、太宰としては思ひ切つた飛躍のつもりであつたかもしれぬ。身ぶりが大げさである。悪口をいわれれば彼だつて怒るだろう。しかし、その怒りを押し殺して、孤独な世界にしのびこむところに彼の仕事の本質があり、特色があつたのだ。そういうものを芝居と感じ、それを振りすてるために、思つ

た通りのことを書く、という決心は、やはり彼流の飛躍のころろみであつたかもしれない。しかし、この率直は見当ちがいであつた。的を十分に射ていない。そして、どうでもよい軽い表現のところだが、相手をかすつた。あぶない芸当である。資本を食いはじめたような感じがした。太宰の飛躍を助けるつもりで、このような方向を暗示したとすれば、一応は正しかつたのである。しかし、それをすぐに強いたのは、好意のあるやり方ではない。彼がこういうものを書きたいと思つたのか。あおられたのかもしれないが、あおられすぎた。一体だが『如是我聞』を書かしたのか。これは冷酷な東京の感覚のしわざである。

『斜陽』と、『如是我聞』と、『人間失格』と、こうならべて見ると、東京の恐ろしさの中で、病気のからだをかかえ、過去の亡霊につきまといわれた彼の姿がよくわかる。彼の目は、あいかわらず涼しかつたかもしれないが、からだは泥まみれだつたのだ。／太宰よ。わたくしは君の自殺はどうしても賛成できないのだ。こうして徹夜しながら、君のことを書いているのが、ちつともたのしくないのだ。なんだつて、水道の水の中などにずり落ちたのだ。君は愛情をもてあました人間だ。しかし、愛情の使ひ方を知らなかつた男だ。何だつて、井伏の悪口なんか書いて、破つたままにしておいたのだ。井伏を悪人だと思ふ人間などは居ないから、かまわないようなものだが、『如是我聞』に反対だつたのは、井伏だけではなかつた。君は、自分で自分の愛情を絶ち切ろうとした。つまらぬことだ。中野好夫は、『如是我聞』で切りつけられたが、自殺すれば君の方の敗けだとほざいたぞ。渡邊一夫は、憂うつな顔をしたが、君の自殺をやはり病的だと云つたぞ。君は病人

だつた。たしかに病人だつた。自分をいたわることができない病人だつた。

石川淳「太宰治昇天」(『新潮』第四十五卷第七号、昭和二十三年七月一日発行)には、つぎのように記されている。

「如是我聞」と題するものがある。ここでは「楽しい雰囲気を創る事に努力する」ことなどはみごとに抛棄されて、もはや「おいしい奉仕」のたくひではない。これはただ悪生活はかくのごとしといふことの、例證をもつてする弾効である。たつたこれだけのことを書くのに、太宰君は「必死」であつた。死を決しなくてはたつたこれだけのことすら書けないといふところに、太宰君の清潔なる弱さがあつた。これは芸術家でなくては断じてもつことを許されない弱さである。けれど、この弱さは地上に於ける善の性格にほかならない。

坂口安吾「不良少年とキリスト」(『新潮』第四十五卷第七号、昭和二十三年七月一日発行)には、つぎのように記されている。

斜陽には、変な敬語が多すぎる。お弁当をお座敷にひろげて御持参のウイスキーをお飲みになり、といったグアイに、さうかと思ふと、和田叔父が汽車にのると上キゲンに謡をうなる、といふやうに、いかにも貴族の月並な紋切型で、作者といふものは、こんなところに文学のまことの問題はないのだから平気な筈なのに、実に、フツカヨヒ的に最も赤面するのが、かういふところなのである。／まつたく、こんな赤面は無意味で、文学にとつて、とるにも足らぬことだ。／ところが、志賀直哉といふ人物が、これを採りあげて、ヤツつける。つまり、志賀直哉なる人物が、いかに文学者でないか、単なる文章家にすぎん、

といふことが、これによつて明かなのであるが、ところが、これが又、フツカヨヒ的には最も急所をついたもので、太宰を赤面混乱させ、逆上させたに相違ない。／元々太宰は調子にのると、フツカヨヒ的にすべつてしまふ男で、彼自身が、志賀直哉の「お殺し」といふ敬語が、体をなさんと云つて、ヤツつける。／いつたいに、かういふところには、太宰の一番かくしたい秘密があつた、と私は思ふ。／彼の小説には、初期のものから始めて、自分が良家の出であることが、書かれすぎてゐる。／そのくせ、彼は、亀井勝一郎が何かの中で自ら名門の子弟を名乗つたら、ゲツ、名門、笑はせるな、名門なんで、イヤな言葉、さう言つたが、なぜ、名門がをかしいのか、つまり太宰が、それにコダハツてゐるのだ。名門のをかしさが、すぐ響くのだ。志賀直哉のお殺しも、それが彼にひびく意味があつたのだらう。／フロイドに「誤謬の訂正」といふことがある。我々が、つい言葉を言ひまちがへたりすると、それを訂正する意味で、無意識のうちに類似のマチガヒをやつて、合理化しやうとするものだ。／フツカヨヒ的な衰弱的な心理には、特にこれがひどくなり、赤面逆上の混乱苦痛とともに、誤謬の訂正的発狂状態が起るものである。／太宰は、これを、文学の上でやつた。／(略)／太宰の遺書は、体をなしてゐなすぎる。太宰の死にちかひころの文章が、フツカヨヒ的であつても、ともかく、現世を相手のM・Cであつたことは、たしかだ。もつとも、如是我聞の最終回(四回目か)は、ひどい。ここにも、M・Cは、殆どゐない。あるものは、グチである。かういふものを書くことによつて、彼の内々の赤面逆上は益々ひどくなり、彼の精神は消耗して、ひとり、生きぐるしく、切

なかつたであらうと思ふ。然し、彼がM・Cでなくなるほど、身近かの者からカツサイが起り、その愚かさを知りながら、ウンザリしつゝ、カツサイの人々をめあてに、それに合せて行つたらしい。その点では、彼は最後まで、M・Cではあつた。彼をとりまく最もせまいサークルを相手に。／(略)／宮様が、身につまされて愛読した、それだけでないか、と太宰は志賀直哉にくつてか、つてゐるのであるが、日頃のM・Cのすぐれた技術を忘れると、彼は通俗そのものである。それでいゝのだ。通俗で、常識的でなくて、どうして小説が書けようぞ。太宰が終生、つひに、この一事に気づかず、妙なカツサイに合せてフツカヨヒの自虐作用をやつてゐたのが、その大成をはんだのである。／くりかへして言ふ。通俗、常識そのものでなければ、すぐれた文学は書ける筈がないのだ。太宰は通俗、常識のまっとうな典型的人間でありながら、つひに、その自覚をもつことができなかった。

柿添茂「太宰治に聞いた話——その印象と言葉」(「時代」第三巻第八号、昭和二十三年八月一日発行)には、つぎのように記されている。
芥川龍之介と太宰治／(略)／そこで芥川龍之介を、太宰氏が何と思つてゐるか、それは大きな謎であり、関心の的でもあつた。僕はそれとなく訊いてみた。案の定氏は芥川に対して、絶大の尊敬を懐いてゐた。／「僕も四十まで生きようとは思はなかつたが、芥川のことを考へると、本当に耻かしい。」／氏は敬虔な気持で、さう云はれた。矢張りさうだつたか、僕はさう思はずにはゐられなかつた。／「志賀にどうしてあんなに遠慮をしたか、全く義憤を感じるね。」／「芥川

の『舞踏會』はい、ね。うまいねえ、ちゃんと知つてゐただね」／自分で叮嚀に「舞踏會」の筋を話して聞かして、／「最後にかう云ふんだ。何と云つたつけなあー」／氏は、ジュリアン・ヴィオーといふロテイの名前を、即座に思ひ出されなかつた。それでうまく話が行かなかつたが、「舞踏會」には、大変感心してゐられる様であつた。／「文芸的な、余りに文芸的な」の話が出た時、氏は、／「あんな風な物を、来年新潮に書くことになつてゐる。」／それが楽しみの様に、さう云はれた。僕はそんな言葉の端からも、氏が芥川を敬してゐられることを、愈々深く感ぜずにはゐられなかつた。愈々来年は面白くなるな、さうも思つた。／無論それは、「如是我聞」の事であつた。「文芸的な、余りに文芸的な」と「如是我聞」との距りは、広大であらう。そこに芥川と太宰の相違は、歴然としてゐるであらう。一方は冷然とし、他方は痛ましいまでに激してゐる。「或阿呆の一生」や「或旧友に送る手記」は、凡そ極限的に痛ましいけれど、文章は、冷然と、品格を保つてゐる。「文芸的な、余りに文芸的な」は、一分の狂ひもない論理の間に、心憎いウィットさへ示してゐる。それに比べて、「如是我聞」の激しさは、どうであらう。「文芸的な、余りに文芸的な」の様な物を——と太宰氏は云はれたが、その時既に、「如是我聞」の激しさを、心に秘めてゐられたであらうか。／「あんな物を、来年新潮に書くことになつてゐる。」／さう云はれた時の氏の心には、まだ「如是我聞」の「斬込み」の決意は、出来てゐなかつた様な感じがする。芥川を深く敬して居られた氏は、或ひは「文芸的な、余りに文芸的な」の水も漏らさぬ論理と、心憎いウィットに惹かれながら、自分を異質の者と

感じて居られたかも知れない。芥川に対する畏怖の念は、「西方の人」に就いて語られた、次の様な言葉の中に、かなりはつきりうかゞへる様に思はれる。／「芥川はキリストをちゃんと見てゐるからね、今から見ても、少しも狂ひがない……」／さう云はれた時の氏の態度には、嚴肅なものが感じられた。／芥川龍之介と太宰治——長い間の疑問を解かれた様な、一種の満足を、僕は感じた。／志賀直哉／太宰にとつて志賀直哉がどうしてあんなに目の仇のようになるのか、不思議なほどである。このことは「如是我聞」に、かなりはつきり書かれてゐる。

この事は、太宰文学を考へる場合、根本的な考察を要する事柄であらうが、茲では只、一言のもとに言はれた次の言葉を記しておくに止めよう。／「志賀は、泥臭くて読めねえ。」／志賀といふ言葉を口にする時、氏は汚らしいものであるかの様に、忌々しさうに、顔をしかめて居られた。芥川龍之介が頭を下げた志賀直哉に——／（略）／芸術奉仕説／太宰氏は、「如是我聞」に、芸術奉仕説を明言して居られる。この思想は太宰氏には、かなり以前からある様である。例へば「懶怠のカタル」の中にも、かなりはつきり書かれてゐる。然し、奉仕説といふ独自の考へは、「如是我聞」を待たねば、はつきり気づく人は、少なかつたであらう。

河盛好蔵「人間修業」(「風雪」第二卷第八号、昭和二十三年八月一日発行)には、つぎのように記されている。

太宰治君が終戦後疎開先から帰京してからはつとめて文壇的交友を避けようとしてゐたことは誰の眼にも明らかであつた。「文学界」の同人にはなつてゐたが、恐らく同人会などには出席してゐなかつたら

う。「俺は「文学界」の獅子身中の蟲になるつもりだ」と云つてゐたといふことを聞いてゐる。彼が最後の精力を傾けて闘はうとしてゐたのは、文壇の権威とその慣例ルイナに対してであつたことは注目に値する。しかし死んでしまつては、折角の「如是我聞」も行きがけの駄賃に似た感じしか与へず、あれでは結局敗北である。

臼井吉見「大宰治論」(「展望」第三十二号、昭和二十三年八月一日発行)には、つぎのように記されている。

『もの思ふ葦』といふエッセイのなかで、「眠られぬままに、ある夜、年長の知人へ書きやる」といふ、前がきのある手紙があるが、そのむすびに、「ほととぎす、いまはのきはの一聲は、死ぬるとも巧言令色であれ」と若い二十代の太宰はかいてゐる。／これは、おそらく彼の生涯の祈願だつたにちがひなく、また事実、彼の実生活と文学とは、この祈願の実現だつたと思ふが、しかし、かんじんのいまはのきはには少しばかりそれが裏ざられたことはもはや誰でも知つてゐよう。その一つは、いふまでもなく『如是我聞』である。このエッセイは異常なげしい決意で書きはじめられたことを知つてゐるので、生涯の祈願を裏ぎつた、このはげしい聲が、どんなに深く彼のなかにこもつてゐたかを思はせるものだつた。名前はあらはに書かれてゐないまでも、最初に口をついて出たのは、志賀直哉に対する抗議であつた。古くは芥川龍之介、近くは織田作之助が、いづれもその晩年において、志賀直哉に対して、異常な関心を示したことに關聯して、太宰の『如是我聞』はその意味でも注目すべきものであらう。芥川龍之介が、その晩年、「話らしい話のない小説」にあこがれ、実生活と文学とを古典的

整齊と静寂のなかにゆるぎなく結合調させた志賀直哉の文学を羨望した、いたましい眼ざしについては誰でも知つてゐる。すべてを理智で計量し、彩色したこの繊細な意識的作家が、あらゆる計量と彩色とをふりすてた無意識的なほどにも強靱な意識的作家を羨望したことは、芥川にとつて、いたましい敗北であつた。このことは彼の死を悼んだ志賀の冷然たる『杳掛にて』と照合するとき、この敗北は決定的といつていい。そのやうな敗北を遂げたところに、むしろ芥川の文学史的位置と意義が決定されたことはいふまでもない。／それからおよそ二十年、織田作之助の眼に大きく映つたのが、同じくこの志賀のすがただつた。だが、今度は羨望ではなかつた。不満であり、抗議だつた。むしろ焦慮だつた。志賀直哉の文学を突破しないかぎり、新しい文学の可能性はないといふところから来たものであり、志賀のいはば肉眼のリアリズムに対して彼は虚構による新しい可能性を提唱したのであつた。その実践の代表的なものが『世相』であらう。織田の文学は、かつて中村光夫が簡潔に評しえたやうに、彼自身を世相の一片に化したところに成立したものであつた。彼の志賀直哉への反抗は単に手法上の範囲を出でず、みづからを世相の一片に化することで志賀のリアリズムに対抗しようといふのは、捨て身の戦法といへ万一にも勝つ見こみのあるはずはなかつた。ところで、いまはのきはに、志賀直哉にはげしい抗議と糾弾を提出した太宰治は、このやうな芥川や織田のそれとはまつたくちがつたかたちと意味をもつてゐると思ふ。／さきにふれたやうに、実生活の文学化を完璧なかたちで遂行した人はいふまでもなく志賀直哉である。つねに実生活が題材だつたなどといふ

のではない、題材といへば実生活ばかりか、さまざまにとりあげてゐる。ただ、どのやうな場合にも、彼の実生活は彼の文学からはみ出してもゐなかつたし、縮んでもゐなかつたといふ意味である。それどころか『和解』といふ作品のなかに、父との衝突の場面を描くことによつて、実際におこるそれを避けようとしたことさへがかけられてゐる。

実生活と文学とのこのやうな交流と調和、しかもここでは、実生活が作品の解説になるのでもなく、作品が実生活の保證をつとめるのではない。おのおの嚴として独立しつゝ、まつたき交流と調和を示してゐるのである。文学と実生活をこのやうな関係において、このやうなものとして実現したのが志賀直哉であつた。『蒲團』にはじまつた私小説が、志賀直哉にいたつて、いささかの歪みもたぬ強靱なものとして、ほとんど古典的な静謐をもつて成立した所以である。彼においては文学者たることは、同時に生活人たることにほかならなかつたのである。／太宰治は、もとよりこのやうな私小説作家ではない。といつて、いはゆる客観的小説作家でないこともとはるまでもあるまい。彼ほど終始自己を告白し、自己を歌ひつづけて来た作家はないといつていい。どのやうな私小説作家も彼ほど自己を語つたものはない。そのくせ、いはゆる私小説作家の仲間にいれることのできないところに彼の独自性があるのである。私小説作家のなかでは、強ひていへば、同郷の先輩として尊敬してゐた葛西善藏に一ばん親近性があるのであるなからうか。『碧眼托鉢』といふエッセイのなかで、／「孔子曰く、『君子は人をたのしませて、おのれを売らぬ。小人はおのれを売つても、なほかつ、人をたのしませることができない。』文学のをかしさは、

この小人のかなしさにちがひないのだ。ポオドレエルを見よ。葛西善藏の生涯を想起したまへ。』といつてゐるが、おのれを売つても、なほかつ、人を樂しませることができない小人のかなしさを葛西善藏に通ずるものであるとともに、より明かに彼自身を語るものであらう。そして、これが志賀直哉との決定的なちがひであることいふまでもない。おのれの文学のために、おのれの実生活をさいなみ、傷つけ、つひにこれを絶体絶命の袋小路にまで追ひつめ、実生活をあげて文学の犠牲たらしめたのが葛西善藏であつた。『醉狂者の獨白』のごとき、その実生活を袋小路のどんづまりまで追ひつめることによつて文学に化せしめた代表的なものであらう。太宰の文学もまた一見、これに通ずるものを思はせるところがあるが、実はまるでちがつてゐるのだ。

おのれを売つても、なほかつ、人を樂しませることができない小人のかなしさといつても、葛西は文学のためにおのれを売つたのではなく、売つたのはおのれの実生活であつた。太宰もまた実生活を売りつくしたこと、この先輩にひけはとらなかつたが、実生活ばかりでなく、おのれ自身を売つたのである。葛西は追ひつめられた、おのれの日常生活を語るよりほかに手はなかつた。太宰は、たえず自己を語つたが、一度もおのれの日常生活を語らなかつた。『一日の勞苦』のなかに次のやうな言葉がある。／「私は、ディレツタントである。物好きである。生活が作品である。しどろもどろである。私の書くものが、それがどんな形式であらうが、それは、きつと私の全存在に素直なものであつた筈である。この安心は、たいしたものだ。すつかり居直つてしまつた形である。自分ながらあきれてゐる。どうにも、手のつけやう

がない。」／「ここでいふ「生活が作品である」といふことに、彼の場合、寸分も誇張はないが、これはおのれの日常生活の作品化といふことはまるでちがつたものだ。それよりも、「私の書くものが、それがどんな形式であらうが、それは、きつと私の全存在に素直なものであつた筈である」といふ言葉にこそ注意する必要がある。この自信を見のがしてはならない。まことに太宰の文学は終始彼の全存在に素直なものであつた。実生活に素直だつたのではない、全存在に素直だつたのだ。全存在に素直たらんとして、実生活をつぎつぎに破壊した。むしろ、破壊しようとして、破壊したのではなく、おのれの全存在に素直であらうとすれば、否応なく、それは日常生活の破壊とならざるをえなかつたのである。／（中略）／ともあれ、彼は、全生涯を挙げて、自己を独自にして確固たる文学と化せしめた。この明白な唯一の事実をぬきにして、彼の死に同感することほど無意味な滑稽はまたとない。／「いまはのきはの一聲は、死ぬるとも巧言令色であれ！」と念じ、「面には快樂をよそほふ」この作家が、『如是我聞』において、最後に提出したのは志賀直哉に対する、激烈な抗議と糾弾であつた。いままで述べて来た太宰の全文学を考へるとき、彼こそ志賀直哉に対立する、たつた一人の作家ではなからうか。芥川龍之介は志賀を羨望した。織田作之助は反抗した。太宰だけが志賀直哉に対立する文学を創りえた、ただ一人の作家である。古典的完成に対して、「浪漫的完成」を。

水口伸二「逆流の詩——太宰治の文学——」（『時論』第三卷第八号、昭和二十三年八月一日発行）には、つぎのように記されている。

——いよいよとなれば妻子を振り捨て、地下道に落ちて、文学を成し遂げる！——と、人に語つていた彼の決意は、いささかもかりそめの壮語とは思われないものであつた。——恋か、革命か……よしんば、恋には半ば絶望していたとしても、彼は彼なりの「革命」には長い夢を托し、はげしい行動意欲を持つていた。「如是我聞」は、あきらかにそのような意欲の、一つの現れであつたらう。その仕事に、彼はほとんどのちがけといつてもよいほどの意気込みようであつた。いうまでもなく、それは、革命などといえるものではなかつた。まだ、闘争にさえ達してはいなかつた。／いいうべくんば、闘争の名乗りであり、物ごとのほんの序の口にすぎないものであつた。

中野好夫「志賀直哉と太宰治——文芸時評——」（『文芸』第五卷第八号、昭和二十三年八月一日発行）には、つぎのように記されている。

太宰の死について「如是我観」という文章（もつとも勝手にこんな題をつけたのは新聞の編輯者であるが）を書いたら、早速珍妙なハガキが一枚舞いこんできた。はなはだ愉快だから、一つ披露に及ぼうと思ふが、むろんこうした先生に限つて名前も住所も書いてはない。／前略、『貪婪、淫亂、剛の者』の大馬鹿先生よ、君は、太宰治が死んでなんだか嬉しそうな顔をしてるね。「如是我観」イヤに嬉しそやないか、ハッハ。「理由はとにかく、ほんとに生きることがいやになつた人には、静かに死なせてあげることが礼節であらう、云々。」

——あ、この悪魔の相貌よろしき偽善！——おい、中野、マル見えだよ、君の腹の中が。眼をほそめて、そして多少卑窟にニヤニヤわらつてるぢやないか。バカ！「頭ではどうやら理解できないこともない、

云々。」はつきり言っておくけれどもね、君の太宰治が理解できない理由は、世代の相違にあるものぢやないよ。仮令君が今二十代三十代であつても、その血質を以てしては、太宰治はピンと来ないよ。要するに、お前のセンチメントというのが、マムシの末のそれであるからだな。呵々。／以上がつまり全文である。いつたい本誌の編輯者からも、今月は太宰の死についてという強い希望であつたが、ぼくはかたく拒んでいた。事実太宰の死そのものについては、好い意味にも悪い意味にも書きたい興味は今でもほとんどないからである。（理由はあとでも書く。）だが、そこへヒョッコリこの一枚が舞いこんで来たので、急にもう一度書いてみる氣になつた。もつともそれでも直接太宰の死についてではない。太宰の死よりも、太宰を囲んでいた、たとえばこのハガキの筆者に見られるようないわゆるファンどもの存在に關してである。／純情な？ 太宰ファンなどから見れば、ぼくが「貪婪、淫亂、剛の者」の大馬鹿先生であつたり、「悪魔の相貌よろしき偽善」者であつたり、はたまた「マムシの末」であつたりするのは当然である。よくも言い当てたりと賞めてあげたいほどである。だが、お氣の毒ながら、ぼくは自から彼等のいう偽善者たることを念願し、偽善の効用を信じている人間だから、折角の罵倒もたしかにぼくをニヤニヤさせるだけである。もつと率直に言えば、ぼくは太宰の死を近來の社会喜劇の一つだと信じている。（もつともそんな喜劇にしてしまった罪は、大半ひどく礼節を知らない近來ジャーナリストの責任にあることはむろんである。）そしてむしろ願うことは、今から言つても詮方ないが、太宰が今少しぼくのような偽善者になれる人間であつ

てくれれば、という一事である。／いつたいぼくは太宰の死と、それに関する文士文学者諸君の、純情なというのであるう、いろいろ美しい感想を読んで、一つ大きな疑問がある。太宰の苦しさをいい、太宰の純情を言い、太宰の美しさをあげた人間は掃くほどあるが、いつたい太宰夫人の立場に立つて考えた感想は果して何人あつたか。太宰はたしかに純粋な男であつたのだろう。渡邊一夫君などは、あんな純粋人がもつと幸福に住みうるよい世界を、とまで切々たる慟哭を投げつけたほどの純粋さである。いかにも「マムシの末」であるべくなどにとつては所詮わからぬことであるが、少くとも、太宰夫人に対する太宰の今度のやり方は有体にいつてゼロである。ゼロ以下である。もはや愛情もなにもなくなつてゐる夫人であるならばまだしも、太宰の死前後の文章に見ても、夫人に対する愛は苦しいほどのものがあることがわかる。一方では平凡な家庭の幸福をさえ願つてゐた太宰であることもわかる。そして現に二つの幼児まで産ませている太宰ではないか。その彼が場所もあらうに、夫人の家の鼻の先から他の女と抱き合つて浮び上るなどもはや醜態の極である。なにもぼくはフェミニストだからいうのではないが、こうしたことが女の心にとつていかに大きな打撃であるかということ、それくらい思いやりも自制もないとすれば、人間馬鹿か狂人である。死んだ山崎某と太宰との死直前の關係がどうであつたものか、ぼくはほとんど臆測するほどの興味もないが、よし女がひとり積極的で、太宰がそれに引きずられたものであつたとしても、これはますます奇怪である。よろしく太宰は偽善者でなければならなかつた。彼の純情とやらはどうであるにせよ、純情を殺すだけの

偽善者でなければならなかつた。ましてその死後の発表になる山崎某女の日記などに見れば、頭の悪るそうな、感傷過剰症の女である。太宰も太宰だ。あんな女と朝晩向い合つていて、よくもアクビが出なかつたものとはぼくには思えるが、それだけにあんな女の道連れになつて、夫人と子供にあの最大のショックを与えてしまつた太宰の死をぼくはどんな意味でも純情などとヤニ下る気にはなれない。／だが、問題はそれからだ。太宰自身のこととはもう仕方がないとして、いつたい太宰ファンなどという愚物どもは、このことをどう考えているのであろうか。いずれ新聞その他の報道で承知していることだから、あまり当てにはならないが、少くともぼくにとつては、文士たちの感傷的な、文学独善の凡百の感想よりは、あの女の老父が再三語つていた、「奥さんに対して相すまぬ」といい、また「せめてもの夫人へのおわびである」と述べて、娘の遺骸を割いていつた人間らしい至情の方にはるかに心を打たれた。(もつともこの老父も娘の日記を、いずれ金に目がくれてであろうが、他愛もなくジャーナリストの手に渡してしまつたのにはガツカリした。)／とにかく率直にいつて、友人と称する文士の感想類は、井伏鱒二氏くらいを除いて、例外なくダラシなかつた。文学の面汚しといつてよいほど感傷に溺れたものであつた。だが、それよりもひどいのは、なんといつても最初にかえつてあの珍妙な投書家先生に見るごときいわゆる太宰ファンなるものの存在であろう。武蔵野局の消印があるところを見ると、いずれあの辺の太宰ファンの人であらうと思えるが、こうした下らないファンに囲まれてワイワイと「二十世紀の旗手」にかつぎ上げられていた太宰の不幸は実に大き

い。とても一人前の代物ではないのだからである。／くり返しているが、太宰にも太宰なりに苦悩もあり、純粹さもあつたであろう。だが、それらはすべて極端に反社会的、個人的なものであり、渡邊君のいわゆる「よりよき社会をつくることとは」およそ遠い種類のものでなければならぬ。よりよき社会とは、他人のつくつてくれるのを待つていべき性質のものでないのはむろんであり、太宰の生き方の如きはおよそよき社会を自から破壊する底の反社会エゴイズムにほかならない。／太宰の死によつて、さらにそれ以上醜態をとどめたのはジャーナリズムであつた。もし現代ジャーナリズムが、せめては「死にたい人を静かに死なせるだけの礼節」くらい心得ていたならば、太宰の死はこれほどまで喜劇じみはしなかつたであらう。死の前後の報道陣は無作法ぶりについては、数々のまさかと思える珍談まで聞き及んでい

るが、ジャーナリズムの水準も下落したものである。／やはりこれも戦争のブランクによるものであるうか。若いジャーナリスト諸君が、学校を出て、入社早々、ロクな訓練も経ないうちに応召する。敗戦後帰つてみると、先輩はほとんど脱けて、こうした若い連中がたちまち中心になつて紙面をつくる。これではロクな新聞ができるはずはない、とはある老新聞人が語つた言葉だが、たしかにさういうところはある。／ジャーナリストが、直接には職業人的本能によつて行動するもので、必らずしも社会的良心に従つて動くものでないことはわかつているが、それにしても職業的に動きながら、しかも無意識に反応する社会的意識というものが、最初の訓練次第ではできるものと思う。早い話が、有島、芥川の死は、今度の太宰の死などよりはるかに深く、かつ

大きい社会的意義をもつていたと断言できるが、それでも報道陣は、今度のようにエゲツない、卑俗な態度はとらなかつたように思う。／最近さらさら相手の女の日記というものが、ある週刊誌のほとんど全紙面を使つて発表されているが、果してその雑誌の広汎な読者層が編輯者の発表理由としてか、げているような問題を考えるような種類の人たちであるかどうか。まして日記そのものは、今の日本のもつとも非知性的で、感傷過多症の女の感情生活をさらけ出しているにすぎない、実にくだらない内容であるにおいておやである。結局その同じ雑誌の「週間放言」という欄に、「太宰の情死がこんなにも雑音を呼び起しているというのは、時勢の不健全さを反映するものとも思はれ、決して後世史家に恥じないといえる出来事ではない」と、これはまたあまりにもヌケヌケと本当のことを吐いているが、かんじんその雑音をまき散らした御本尊が自分とあつては駄ジャレにもならないのである。／月々の創作をとり上げて月旦するばかりが時評というわけでもあるまい。たまには創作評抜きの時評もあつてわるいという理由もあるまい。そこで、太宰ついでにもう一つ書く。／「如是我聞」で、周知のように太宰はまだ志賀直哉にかみついている。渡邊一夫君や、かく申すべくをやつつけた時もそうだが、あゝ男のヒステリーのように喚き立てては気の毒ながら相手にはあまり応えないと思うが、それにしても志賀攻撃は少しつこすぎて、何か松澤的なものを思わせる。／だが、それにしても志賀という存在は異様奇怪な存在である。太宰を憤死させたばかりでなく、すぐ前には織田作をやはり憤死させている。さらに前には芥川の文学に対する深い絶望の中にも、志賀文学と

いう亡霊が大きな影を投じていたはずだ。／考えてみると妙な話である。織田の如きは、志賀に「きたならしい」と一言云われたばかりに完全に逆上してしまつた。太宰もやはりどうやらその口らしい。えらいものである。ぼくは、太宰、織田同様、志賀にもまた一面の識もないし、別に会いたい興味もない。しかしどうも遠くから離れて見ている景色では、この勝負、勝負としては完全に織田、太宰の負けである。人の一言で逆上して、ヒステリー男のように玩具の刀をいくらやたらふりまわして見ても、相手は毫も痛痒を感じるものではない。現に読んでみたまえ。織田にしても、太宰にしても、かんじん志賀文学の到命的弱点は一として突きえていないのだ。それにしても思うのは、志賀という個性のおそろしい強さであり、その前にまるでキリキリ舞いしている、あまりにも弱い人間織田であり、人間太宰である。／結局太宰も織田も（そして芥川も）、志賀の文学を正面からは少しも克服してていないのだ。むろん今日、志賀文学そのまゝの延長からはもはや何物も出て来ないだろうし、近作「蝕まれた友情」などが、どうひいき目にみてもそう高く珍重できるものではないことはいうまでもない。しかしながらとにかくこの老作家が「暗夜行路」までに成しとげた仕事というものは、なんとしても偉大なる事実であり、いわば鉄壁である。新しい作家としては、志賀を越えることは、いやでもこの鉄壁に一度は真正面から打つつかることではなければならない。そつとよけて通る道はないのである。しかも打つつかつてみた場合、案外こわれるのは先方の鉄壁ではなくて、ぶつかるとこちらの頭なのだ。ぼくなど小説を書かないから幸いだ、いやしくも小説を書くものの身にな

つてみれば、志賀の過去の仕事というものは、いわゞ頭の上へのしか、つている巖のようなものであるにちがいない。たまらない気持はよくわかる。そしてその気持がやがて逆に猛烈な反志賀論にもなるのである。いつてみれば織田の志賀叛逆も、太宰の志賀罵倒も、詮じつめれば自分の心の中の劣等感に鞭打をくれているのである。／古く織田を知るある人から聞いた話だが、本来織田は志賀に読んでもらいたかつた。一言でもよい賞めてもらいたかつたのであるという。そこをいきなり「汚らしい」とやられたもので、俄かにのぼせ上つて食いついて行つたのだというのであるが、ありそうなことにはよくも思える。太宰にしてもやはりそうだつたのではないか。本心は賞められたかつたのだとほくは思う。そうでなければあんなにしつこい、要領をえない罵倒はありえない。結局は愛してもらいたくてたまらない男を、一つちがうとおそろしく憎む女の心理とよく似ている。／それにしても文学に関する限り、志賀の強さというものは日本人ばなれをしておそろしい。志賀本人にはずいぶん迷惑だろうが、芥川を殺し、織田、太宰を悶死させた念力といふものは驚嘆に値する。もつともそういうえば、ほくなど批評家がなにを言おうと、作家にしてみれば、そういう貴様に何が書ける、口惜しければ書いてみると一言開き直ればそれでお仕舞だから、なんともなかるうが、志賀相手となるとそれは参らぬ。古い、新しいは別として、とにかくあれだけの仕事をしている彼である。なるほど悶死したくなるのも無理はない。／ほくはいつか「蝕まれた友情」について、作品としては別に珍重しないが、しかしもう六十を越えて、普通ならばかつての友情のもつれも、もうやれやれとお互いに

水に流したくなる年齢になつて、実は逆にかつての「蝕まれた友情」をあ、まで一方的に、絶対不動の自信をもつてさらけだす気強さになつてはちよつと凡人のほくなど僻易する。が同時にあの一頃の志賀文学を産んだ精神的源泉をこ、に見たように思つて興味深いと書いたことがあるが、とにかくおそろしい個性である。林房雄などもしきりに近頃志賀を目の敵にしているが、勝負は公平なところ、林の方がはるかに善人で、人がよい。／むろんほく自身も志賀はすでに完了形で語られてよい作家だと思つている。(もつとも志賀がこれで腹を立て、彼の「夜明け前」を完成してくれるならば、それはそれで結構だ。批評者として名譽の眼ちがいだと思つただけである。)しかしほんとうに志賀を完了形として語り、ほんとうに志賀を克服しようと思つたらば、志賀の片々たる談話の端くれなど歯牙にかけないことが第一である。ホホウ、志賀が、と言いつけてるくらいになり、稀には志賀文学のかつての意義をほめてか、れるくらいの器量にならなければ、この老作家とうてい克服などできる生易しい小者ではないと思つたのだ、どうだろう。

杉森久英「編集者の言葉」(「文芸」第五卷第八号、昭和二十三年八月一日発行)には、つぎのように記されている。

★ 太宰治氏の突然の失踪とその死とは私達に大きな衝撃を与へた。顧みれば、処女作以来、氏の作品には絶えず死の予感が漂つてゐたのであるが、今日明日のこととも思はれなかつた。その日が訪れてみると、やはり私達の驚きと悲しみは深い。時代の病ひと人間の罪業を一身に擔つて、よろめきながら歩んだこの人の足跡をたどるとき、

一掬の涙を禁じ得ないものがある。／★ しかし、批判の眼は感傷の涙に曇らされてはならぬ。その死を悼む情とは別に、その死の持つ意味を正しく解くことも忘れてはならない。病める時代の旗手であった太宰氏は、その故にまた、ひとりの気の毒な病者だったのではなからうか。「如是我聞」の戦鬪的な姿勢の中に、私たちはあまりにも痛々しく病み疲れた氏の表情を見ないであらうか。／★ 本誌が中野好夫氏に乞うて、本号の「文芸時評」において、特に太宰の死について論じていただいたのも、その間の消息を明かにするためである。氏はこの問題を、同じく死の間際に志賀直哉氏の「鉄壁」に突き当たった芥川龍之介、織田作之助と対比しつゝ、明快に解かれた。／★ 太宰氏は「如是我聞」の中で本誌六月号の志賀直哉氏を囲む座談会「作家の態度」(一)に言及して志賀氏に抗議してゐる。いや、挑戦してゐる。太宰の筆調では、氏はあの座談会記事によつて甚だしく感情を刺戟されたかの如くであつた。ほとんど誹謗され、侮辱されでもしたかのやうである。併し、私はこの座談会に出席された人々の名譽のために断つて置かねばならないが、その時の空気は、およそ太宰氏に対する悪感情の片鱗だもなかつた。淡々として、所信が述べられ、事実が語られたのみである。もしそれさへもが咎められねばならぬとすれば、すべて世の批評といふ業は、何を以てその抛り所とすることができらうか。／★ なほ太宰氏は座談会の記録といふものは本人に覚えのないことが多く、いゝ加減なものであるから、……と、この速記録の信憑性を疑つてゐるが、もとより編集部はその点に就いては充分の責任を以て事に當つた。速記録は全部出席諸氏の校閲を受けた上、校正

に當つても、一字一句をも苟もしなかつたつもりである。(因に言ふ、此の篇の速記者は秋山節義氏である。氏は発言者の語癖まで写し取ることのできる練達の人である。)／★ 結局、本誌の座談会記事に関する限り、太宰氏の言は、誣ふるも甚だしいものであつたと言はねばならぬ。私は、なにも故人を相手にして傷つけられた誇りを癒さうとするものではない。たゞ、淡淡として語られた出席者諸氏の言葉が不当に取られた事実を明らかにしたいだけである。／★ むしろ問題はやはり、故人の病み疲れた精神が、これ程些細な刺戟にも堪へることが出来なかつたといふことにあると思ふ。その意味では太宰氏は敗北した人であつたといはねばならぬ。／★ しかし、斯く事態の真相を明かに述べても、私たちの心は慰まれない。この世紀の病弊を一身に擔へる人を失つたといふ痛惜の情は、久しく私たちの胸を去らないであらう。

山本和夫「太宰治覚え書」(「文芸首都」第十六卷第八号、昭和二十三年八月一日発行)には、つぎのように記されている。

文芸(六月)で、志賀直哉氏が、太宰の「斜陽」にふれ、／「太宰君の「斜陽」なんていふのも読んだけど閉口したな。——閉口したつていふのは、貴族の娘が山だしの女中のやうな言葉を使ふんだ。田舎から来た女中が自分の方に御の字をつけるやうな言葉を使ふが、所々にそれがある。それから貴婦人が庭で小便するのなんぞも厭だつた。作者がその事に興味を持つ事が厭なのかも知れない」／学習院出の志賀にとつてみれば、太宰氏の庶民的表装は、はるかに貴族から遠いものであると見えたであらう。併し、私は借問する。志賀氏が、太宰氏

よりも貴族的であるか。それとも、太宰氏が、志賀氏よりも、より貴族的であるか。……面白いテーマではないか。太宰氏は、貴婦人に立小便(?)させた。貴族の娘に、山だしの女中のやうな言葉を使はせた。とにかく、太宰氏は、旅に出て味噌汁を六ばいするやうな田舎つべであつた。屋台で、カストリをあふつた。そのやうな男であつたが、併し、それによつて、太宰氏の詩精神をそれだとかやまらぬ方がよい。このテーマを脱線させぬがよい。何故なら、太宰氏の中に、地方の豪族の持つ貴族的な血が流れてゐた。それが都会で洗煉され純粋な貴族性に昇華してひらめてゐた。時には傲岸に。時には処女のやうに可憐に。／太宰氏の作品は、その貴族性を背景にしてゐるともいへる。また、彼を殺したのも、その精神だともいへる。

平林たい子「脆弱な花」(「芸術」第七卷第二号「追悼太宰治の死」昭和二十三年八月一日発行)には、つぎのように記されている。

私は太宰氏については、長い間文壇を遠ざかつてゐたからこの頃の小説しか知らないし、身辺の事情も小説で想像するだけである。それなのに、その二三行の記事を見たゞけで、氏の死は恋愛よりも芸術の方の圧力で行はれたと直感して疑はなかつた。芸術の喜びと苦しみと悲しみを知つてゐる者には、恋愛はとうてい芸術以上の支配力ではあり得ない。恋愛のためには死ねなくとも芸術への失恋では、芸術家は惜しみなく死ぬるのだ。／しかし、「ヴィヨンの妻」以来一つの方向をはつきり握つた太宰氏が、芥川龍之介のやうな芸術の行詰まりに当面してゐたとは思へない。人間失格などんなにか作家に希望を点じた筈の作品であつた。結局太宰氏の気持はわからないといふほかない。

が「新潮」に連載してゐた「如是我聞」でみると、あの淡白な太宰氏にも自分の小説を攻撃して来たものに対しては粘つこい復讐心みたいなものがあつて太宰の道化の裏側がのぞけてゐる感じである。あ、いふ身がまへで自分の芸術が護られてゐるといふことはさぞ心の疲れることであらう。私には、太宰氏が電球かなんぞのやうな薄い脆いものをどつとかばつてゐる姿が泛んで、むしろ気の毒な気持でよんだ。

小田切秀雄「いやな気持」(「芸術」第七卷第二号「追悼太宰治の死」昭和二十三年八月一日発行)には、つぎのように記されている。

わたしはしばらく前の「新日本文学」に作家の職業意識の通俗化について書き、そのなかで太宰に触れて、人間への肯定と否定との揺れ動くあわいに居直つた戦後のかれの世界の本質上のマナリズム、そしてマナリズムに陥れば陥るほどその豊富な才能を廻転させて一つ一つの作品に新しい装いをこらさねば内的停滞を自身にたいしても読者にたいしてもくらすことができず、このようにして作家的情熱を濫費するに至つてゐる事情について述べた。その後読んだかれの最近の諸短篇、「人間失格」(現在第一回分だけが発表になつてゐる)、「如是我聞」一・二は、いずれも右の濫費から脱出したものではなかつた。

「如是我聞」第一回はその宣言ぶりのめざましさのほどに志賀直哉たちへの切りこみ方において骨に達する深さをもち得ず、第二回の中野好夫たちへの批判も・本質上文壇作家の常識を出るものでなく、ただ常識を巧みな角度とスタイルで「個性的」に展開することが興がられているに終つてゐる。——太宰はこれからいつたいどういふうに自分のこんな状態を破つて出て行くのだらう、とわたしは思わない

ではいられなかった。

下山俊三「不惑ならず」(『月刊東奥』第十卷第五号「追悼太宰治」昭和二十三年八月一日発行)には、つぎのように記されている。

彼の死——の原因は、いろいろ臆測されているが、その一因といわれる最近某綜合雑誌の座談会の志賀直哉の太宰評に、『斜陽』で貴族の娘のことを書いているが、あれはチツとも貴族の娘ではない、山出しの田舎娘ではないか、という意味のことが速記録に出ているが、あの座談会なども太宰の最近、衰えた肉体と精神に与えた打撃は、外部の者が考えるより遥かに強いものがあつたろう。／日本人によりわかない……それも限られた或る一部の『教養ある』読書人にしかわかない、茶室向き小説より書けない志賀直哉が、三人束にして死ぬより太宰一人の死の方が、僕たちには堪え難い痛さであり、損失である。北鬼助「現代の長恨——太宰治を悼む——」(『人間喜劇』第二号、昭和二十三年八月一日発行)には、つぎのように記されている。

だが、彼には、まだまだ元気があつた。活潑な闘志があつた。もつといふ作品を書ける才能があつた。彼は、けつして、それらを、まだ、使いつくしてはいなかった。もつといふ作品が、書けたに違いない。

如是我聞一つを見ても、彼の闘いは、まだ、ほんの序の口にすぎない。けつして、彼は、まだ打ち克つたとはいえない。(闘争とは、こちらだけが武者振るいしてそれですむような、けつしてそんな甘いものではないはずである。)あの巧者な、いのちがけの手捌きで、なにか大きく手綱を引いて、彼自身の人生と文学の向きを変えることさえ、かならずしも望んで望めない奇蹟ではなかったように思われる。

勘「スクーター」(『新大阪』昭和二十三年八月五日発行)には、つぎのように記されている。

新潮七月号の「ある遺書について」と題された塩尻公明氏の一文は、読者の心に事実が持つている感動ともいうべきものを与える。／修得した語学が役に立つたばかりに思いもかけぬ経緯から、戦争犯罪人としてシンガポールで絞首刑に処せられた学生兵土木村君の不幸な生がいは、敗戦国民としての日本人が負わねばならぬ十字架のある一つの様相を物語っている／同じ号の「如是我聞」もある意味で遺書と呼び得る文章であるが、太宰治の死はいわば倫理的・个性的であつて、限界状況における人間実存の決断としての死であるが、木村君の死は社会的・反個性的であつて、それは人間の生理や意志や知識を超えたものによつて決せられている。「戦争に負けたのは俺たちだ」という意識の有無が、現在の日本人をはつきり二つの群に分け、そしてこの分類が思考のスタイルに由来するものであることを、二つの遺書、というよりも二人の死がわれ／＼に教えている。

大井広介「いわゆる大家について——直哉のうけ入れられた(上)」(『新大阪』昭和二十三年八月十七日発行)には、つぎのように記されている。

志賀直哉はいかにしてうけ入れられたか。毒にもならねば薬にもならぬから家庭むききというので良家の書棚にでんと全集が並んでいるといったあんばいで、大体志賀直哉を有難がる人達はあまり他の文学書を読んでいないようだ。(略)／不勉強な奴がいかに多いか、ひとつ例をあげると「九州文学」の「そんなことをしていた日には、第一書

くひまは無いし、読むのに専念したつて、人の一生かかつて読む量は横に本を重ねて一三メートル五三センチということだ……たか／＼六七六冊ではないか」という文章にあきれた。一三メートルというのは全然書物を読まぬ人口をいれての総平均だろう。僅か六七百冊読んでいたら「第一書くひまは無い」とは、まるでひまつぶしに書いているみたいで、不心得千万、こんなろくでなしが多いから、志賀直哉が先生で有難がられる——シエークスピアやゲート、スタンダールやドストイエフスキイの水準からみれば志賀直哉は幼稚園だ。それを大学みたいに思っているから、太宰治の「如是我聞」にびつくりする。そういうであいが多から太宰はわざ／＼「如是我聞」をかいた。

大井広介「いわゆる大家について——虎（志賀）の威をかる狐（中野好夫）——中」（「新大阪」昭和二十三年八月十八日発行）には、つぎのように記されている。

坂口安吾や太宰治や織田作之助や椎名麟三が志賀直哉をくさしたのはごくあたりまえのことなのだ。ごくあたりまえなんだが、非常識なてあいが多いので、あべこべに何か奇抜な発言をしたように受けとられる。／＼ということを知悉して、うまく利用して、志賀直哉に感服しているミイチャンはあちやんの御機嫌をとり結んでいるのが「文芸」八月号の中野好夫の浅間しい文章である。／＼中野の文章によると、志賀直哉が「太宰を憤死させた」「織田作をやはり憤死させている」と、冗談も休み休みにいうがいい、事実を歪曲するも甚しい。織田や太宰がなくなつたのは、志賀直哉をこきおろしたのと、何もそういうのつびきならぬ関連はない。W・Cで用を達して尻をふいたペーパーを捨

てたぐらいいいものである。ぎょう／＼しいにも程があらあ。／＼中野は、太宰も織田も志賀の文学をすこしも「克服」し得ていないという。／＼いくら悪くいわれても、成程、志賀直哉は傷つきはしないよ。「如是我聞」が指摘しているように「シンガポール陥落」という文章で、一億一心は期せずして実現した。今の日本には親英米などという思想はあり得ない、などとかいておきながら、占領されると、内村鑑三の感化で、軍国主義にも犯されず節操を保ち得た、などと語るような神経では、蛙のつらに小便、傷くなんてことはあり得ない。／＼だが、なにも「克服」なんかしなくたつていいじゃないか。太宰は志賀とまるで異質なもの。「克服」しようなど思つてもみなかつたはずだ、ゼンゼン敬服なんかしておらず、漫罵を浴びせたに過ぎない。太宰のことだから、漫罵を加えても、志賀直哉に格別反響のないくらいは百も承知だ。ああいう文章に仕立てたのはミイチャンはあちやんをちよつとおどしてみただけだ。他意はない。／＼しからは中野自身は志賀に傾倒しているかといえ、そうでもないそうで「志賀はすでに完了形で語られてよい作家だと思つている」と、まるで彼が一番エライように思い込ませる仕掛け。／＼大体、中野はいやらしい奴で、戦時中に岩上順一のことを「唯物史観的」とかいた奴だ。戦争中「唯物史観的」とかくことは、警察に何故検挙しないかというに等しい。おかげで岩上が検挙され、岩上の自供で荒、佐々木、小田切が検挙された。岩上がどれ程「唯物史観的」か。私は岩上と歴史文学について葉書で議論したら、彼は早川二郎を「早坂氏ら」とかいていた程度、初歩的な知識もあぶなつかしい。それを検挙しろといわんばかりにいつた奴だ。／＼無頼の

太宰が志賀先生にいかかりをつけおつたと心酔者がマユをひそめて
いるので、なあにあんなのはこわがるに及ばんと人気とりをやる。そ
の上でおもむろに「完了形」などと、如何にも自分が一番エライよ
うなふりをする。鼻もちならぬ俗悪さだ。志賀直哉が中野の文章に「腹
を立てて」いい作品をかければ結構だつて、何をぬかす、いくらモウロ
クしても、中野なんかシガにかけずじや。

河盛好蔵「滅亡の民―太宰論」(「改造」第二十九卷第九号、昭和二
十三年九月一日発行)には、つぎのように記されている。

太宰君の自殺を聞いたとき、まづ私の感じたことは、「戯れに文学
をすべからず」といふことであつた。断つて置くが、これは太宰君の
死に対する批判ではない。私自身に対する戒めの言葉である。太宰君
は『如是我聞』のなかで私たち外国文学者を痛烈にやつつけてゐる。

あの議論はヒステリックで支離滅裂で、反駁の余地はいくらでもある
けれども、しかしあのなかに含まれた数々の君の正しい忠言には、私
も十分に耳を傾けるつもりである。外国の謂はばレットテルつきの文豪
の仕事なら文句なしに尊敬するのに、自分のすぐ隣にゐる作家の作品
に対する同情と理解に乏しいといふ君の抗議はよく承つて置かう。

正宗白鳥、上林暁、中村光夫「創作合評(十七回)」「群像」第三
卷第九号、昭和二十三年九月一日発行)には、つぎのように記されて
いる。

正宗 「如是我聞」(新潮)というのは一回読んだが、八ツ当りの
ことを言つてゐるな。もう死ぬる真際の鬱憤ばらしに……。傍若無人
すぎるくらいだね。／上林 大学の仏文科には相当の衝撃を与えたそ

うですな。人から聞いたんですが。／正宗 仏文学をやつた人ですか。

／中村 仏文を中退です。

木室浩「白井吉見氏の太宰治論を駁す」(「時代」第三卷第九号「特
輯太宰治論批判」昭和二十三年九月一日発行)には、つぎのように記
されている。

白井氏は、最後に、藪から棒に、「生涯を通じて太宰の眼中にあつ
た最大の敵は、おそらくキリストではなかつたらうか。」といつてゐる。
飛んでもない話である。「驅込み訴へ」でも読んで、さういふのであ
らうか。あきれてものが云へないとは、このことである。こんなこと
をいふやうでは、千尋の功も一功も一貫に欠き、かりに立派なことを
云つてゐても、一時におじやんで、当の太宰氏も、あきれかへつてし
まふだらう。／「全部、種明しをして書いてゐるつもりであるが、私
がこの如是我聞といふ世間的にいって、明らかに愚笨らしいことを書
いて発表してゐるのは、何も『個人』を攻撃するためではなくて、反
キリスト的なものへの戦ひなのである。／彼らは、キリストと云へば、
すぐに軽蔑の笑ひに似た苦笑をもらし、なんだ、ヤソか、といふやう
な、安堵に似たものを感じるらしいが、私の苦惱の殆ど全部は、あの
イエスといふ人の、『己れを愛するがごとく、汝の隣人を愛せ』とい
ふ難題一つにか、つてゐると言つてもいいのである。』／これはもち
ろん、「如是我聞」中の言葉である。白井氏は、藪から棒に、何のつ
もりかわからないが、こつちは、何をかいはんや、挨拶にこまるので
ある。

田中英光「如是我喚―中野好夫氏に―」(「時代」第三卷第九号「特

「輯太宰治論批判」昭和二十三年九月一日発行）には、つぎのように記されている。

近頃の文壇を眺めると、まるで、テリアの喧嘩の感がある。ワンワンギャンギャン遠くから吠えあい、自己主張に一生懸命だが、それでいて、中々、相手に近づかない。お互いに、自分の主人、(神様)を頼りにし、勇ましく、猛烈に吠え合い、一旦、相手に弱味ありと看破するや、狂気の如く、執拗に、相手を殺すまで食い下ってゆく。／＼(私はそんな文壇の内輪喧嘩に興味はない。敵は文壇の中になく、現在の政治と、社会機構の中にある。)と、田村泰次郎氏が、なにかの雑誌に書いているのをみて、私は、ギョッとするほど、同感した。／＼しかし、文壇も、政治の悪影響を受けている。政治の世界に、未だに、古い権威が、ハバを利かせているように、文壇にも、太宰さんの必死になつて抗議した、所謂「雑壇」が、そっくりそのまま、残っている。／＼そこでは、老大家、学者、先輩なぞという権威が、上段のほうに、ズラリと陳列され、それを足蹴にでもしようと思うならば、忽ち、文壇、ジャアナリズムから寄つてたかつて袋叩きにされるのである。而し、それを、捨身で敢行した処に、太宰さんの必死の抗議があった。だが、その死を賭しての抗議さえ、(老大家、学者たちの、無神経な自惚に)嘲笑され、黙殺され、罵倒されているようである。／＼そこで私は、その一例として、中野好夫氏の「志賀直哉と太宰治」(「文芸」八月号)という文章に噛みついてやりたいと思うのだ。私は人聞きながら、志賀さんが、私の処女作を認めてくれたとの話をきいた事がある。更に、中野好夫氏も、私の一近作を賞めていたとの話もきいた。

私には大体、味方がない。最近では、唯一の先輩、太宰さんに別れてしまつたし、左右両翼から、しきりにヤツつけられている様子である。だから、こゝで又、志賀さんや中野氏に抗議を申込みば、私はますます孤独になろうというものである。而し、もともと、私は自分のバカな野蠻さに、みんなから嫌はれ、太宰さんの全集委員にさえ、なれなかつた。その中には、太宰さんが絶交し、終生の敵としているような先輩も混っている。(可笑しい事だ)／＼結局、私もひとりで戦かはねばならぬ。大体、日本では、相手にお世辞をいっている間は、向うも、こちらに好意を示してくれるが、一度、相手の真実に近い処をつくると、それだけで、もう向うから嫌はれてしまう。例えば、坂口安吾さんのような大人物からさえ、私はそんな眼にあはされた。(或いは向うで反対だヨというかも知れぬが、私はまだ坂口さんにある敬愛の情を感じている)／＼それ故、今まで幾らか好意を持っていてくれたような、志賀さん、中野氏に、私は、太宰さん、若い作家、若い読者たちと共に、幾らかの攻撃を加えたい。そして、その人たちや、その崇拜者たちから嫌はれるのも、勿論、覚悟の前の積りでいる。／＼中野氏からみれば、私も又、あの、「貪婪、淫乱、剛の者」の大馬鹿先生よ、君は、太宰治が死んでなんだか嬉しそうな顔をしてるね。云々」というハガキを出した、太宰さんの白痴的純情ファンのひとりにも見えるかも知れぬ。私は、こんな風に、太宰さんを御神輿みたいに、半狂乱で擔ぎ廻っている、そうした純情ファンが嫌いである。似た処があるかも知れぬが、私は、これからこそ、大いに太宰さんの文学が論じられるのが本当と思つている。こうしたファンこそ、我さきにと太宰さんの死骸

の現場に駆けつけ、——あ、我慢できない。案外、太宰さんの死の一因となつたものは、中野氏や、志賀さんでなく、こうした（自分の血質が、マムシの末どころか）青大将にも劣っているのに気づかぬ、無知でエゴなファンたちかも知れぬ。私はこうした連中を二、三人、知っており、その連中に、今でも、太宰さんを論じられると鳥肌がたつ。／中野氏は御存じないだろうが、太宰さんの最後の仕事部屋の、Tという料亭のマダムが、太宰さんのこの純情ファンのひとりで、お葬式前後には、泣くやら喚くやら半狂乱だったし、最近でも、誰かが遊びにゆくと、いかにも彼女らしく、シミジミと、太宰さんの思い出を語り、太宰さんのスクラップやらなにやら、博物館式に、みせちらすが、その後ではきまってゲツというほど、勘定をとられる。／中野氏にハガキを出したのも、恐らく、そのマダムと同類の人物としか思はれぬ。それを、中野氏のように、自他共に許す、日本知識人の一代表が、些か、ムキになり、云い返しているのは滑稽である。或いは、そのファンをやりこめることで、太宰さんを軽蔑する積りならば、それこそ、汚らしい次第と思う。太宰さんは、そうした無知なファンをいちばん厭がり、警戒していた。太宰さんは、（世ノ中デ、無知ガ一番、怖イ。）と云い、なにかの因縁や仕事の関係で、そうしたファンたちが、厚釜しく太宰さんの酒席につらなり、（自己陶醉や、太宰陶醉で、夢中になり、而も、太宰さんの御馳走になつたりするのを、とても厭がり恐れていた。もし、中野氏に、そうした純情を取巻き（中には四十前後の男たちさえいる）がなければ、幸いである。殆んどが、売名と、自己陶醉と、お金の為に、太宰さんを取巻いていたのだから。

／或いは、中野氏には、幸いにして、そのような取巻きがいなくても知れぬ。而し、中野氏の、「近頃学生気質のこと」（時代、七月号）を読めば、その中で、中野氏が、どんなにいまの学生のワイワイ連中に眉をしかめているかが分る。その同じひとが、太宰さんと、所謂、純情な太宰ファンを一緒に論じているような不当行為をしているのが、奇怪である。卑しいといはれても仕方ないだろうと思う。／そこで、私は、志賀さんの、戦争中の、「シンガポール陥落」という、軍部に負けた論文を思いだし、中野氏が、文報の外国部会長かなにかだった当時の言動を思い出す。而し、その頃、絶対に、便乗しなかつた太宰さんでさえ、「惜別」の一文を書き直さねばならぬだけの傷があった。（私にはもつとある。）而し、太宰さんは、この御自分の傷に死ぬまで良心的な反省があつたのは、太宰さんの読者ならば大抵知つている。（作品、「十五年間」「返事」その他。）／しかし、私はまだ寡聞にして、志賀さんや、中野氏に、そのような反省の文章があるのを知らない。寧ろ、御自分たちが戦争中、いかにリベラリストであつたかを、自慢にされている文章なら読んだことがある。そうした鉄面皮なればこそ、安料理屋のマダム相手に、滔々と食って掛り、それで、太宰さんも一緒にヤツつけた気持になれるのであろう。／中野氏は、それは、学問の点では、私などより百年の長があるかも知れぬが、（私はそう思はぬが、ひとがいう。バカバカしい。）その文学を理解する能力は、ひよつとすると、一中学生に劣るかも知れぬ。／私は、昔から、太宰さんのフェミニズムや、その女子供へのひたむきな愛を、教えられていたが、先日、近くの、ある中学生がきて、「太宰さんって、とても、

フェミニストなすネ。」と、太宰さんの作品、「ヴィヨンの妻」「櫻桃」等、創作集の感想をいう。私は、これに少し嬉しく、「よく分かったネ。」などニコニコ笑ったが、実際、フェミニストでなければ、「眉山」にしろ、「男女同権」にしろ、「ヴィヨンの妻」にしろ、書けたものではない。／太宰さんは、女を憐れみ愛し、女に、救いをもとめながらも、現実の女の、いまの救はれざる悲しさに、「女類」というような逆説的表現をとられたのである。その次第は、十五年六月、(鷗外の訳したオイレンベルグ原作の)「女の決闘」一篇だけ読んでも、よく分かる筈だ。鷗外には、「即興詩人」の甘い翻訳から、「ちいさんばあさん」などの、美しい男女のロマンを書いたものもあるが、その真実は、女性軽蔑者だったことが、特に、その自伝風の商品から匂ってくる。この作品の原作者、オイレンベルグも、そのように女に冷たいひとで、太宰さんは、必死になり、このふたりの女性蔑視に抗議しているのが、「女の決闘」一篇からもうかがえる。／それを中野氏は大聲に、「なにも、ほくはフェミニストだからいうのではないが、」と、太宰さんに威張っているのを見て、悪いけれど私は苦笑してしまう。それに、中野氏は、なお悪いことに、奥様のお気持を忖度したり、好い気で、サッチャんの悪口を云っておられる。私は前にも書いたように、これからこそ、太宰さんの文学は問題になる筈と思うが、こと、現実の死者に対しては、それこそ、(死者は、死者をして眠らしめヨ。)ではなからうか、と思う。／而し、奥様とお子たちには、まだ、これからの世界がありなので、世上に、案外、中野氏の、短見者的見解が、そのま、通用するのを恐れ、こゝで一言、弁明しておく。近くそ

の一節だけ、私の編む本に、写真で出る筈だが、その未発表の遺書の最後には、太宰さんが、(いつも、お前たちを思って、メソメソしている。私のいちばん愛していたのは、やはりお前だった。)と書いているのである。奥様は、それを神のような素直さで、そのま、信じておられる。なにも、中野氏が、その奥様の気持をかき乱すことはないのだ。／サッチャんの場合もそうだ。あの日記を発表した、A新聞社週間雑誌の、ガリガリ亡者の態度は、私も、中野氏に同感だし、あんな新聞が日本一といはれている処に、私は、日本の悲喜劇感せずにはいられないし、又、中野氏が、サッチャんを呼び、(頭の悪るような、感傷過剰症の女)といっているのにも、些か同感である。／而し、太宰さんは、サッチャんと朝晩、向い合い、時々、アクビをしていたのである。中野氏のいう如く、(よくもアクビも出なかった)どころではない、アクビ、洪面、苦悶の表情になっていたのを、私はよく知っている。そして、ヴェルレエヌに似て、ダラシがなく、小児の如く、純粹だった、太宰さんは、結局、彼女の深情けにひきずられることになつた。けれども、本質的に、太宰さんの死は、サッチャんと関係がない。二葉の枯葉が、別々に、時と処を同じくして、ヒラヒラ舞い落ち、水中で、びったり、くつついた如きものである。だから、中野氏の言や、正に、氏の嫌っているA週間誌の態度と、期せずして一致していると思はれる。／それならば、太宰さんの死の真因はときかれると、私はバカバカしくて笑うのである。私は甘何人の、太宰さん死因説を読んだが、みんな、違っているのが可笑しかった。太宰さんは、生前よく、(太宰治論は、俺がいちばんよく書いているぢやないか。)

といていたが、その死因も、比較的には、太宰さんが、いちばん好く知っていて、後は、身体中、めくら探りにし、(こゝが急所)という、群盲撫象の感がある。たゞ、私は、是迄、誰も書かなかった。太宰さんの死因と思はれるものを二ツ挙げておこう。一ツは、税金問題、(作品、「家庭の幸福」からも想像できる。)二ツは、肉体の衰弱、(太宰さんは、いまのお宅を買うだけのお金もなく、落着いた仕事部屋もなく、完全に、肺を治療するだけの余裕もなく、而して、メッタヤタラに、ジャーナリズムからいぢめられていたのだ。) / コンな風に、中野氏は、見当違いばかりいつているが、太宰さんの苦悩や純粹をさし、「それらはすべて極端に反社会的、個人的なもの。」といつているのは、吃驚する。中野氏は、「人間喜劇」(八月号)に「下層貧困者階級の児童が、その両親たちにとり、重き負擔たるべきことを防止し、且ツまた、これを転じて国家社会の利益たらしむることに關する最も隱健なる一私案」という、スイフトの一文を訳しているが、(この浮浪児を金持の食卓にのせる)という、スイフトの趣旨が、徹頭徹尾、逆説なのに、氣づかれぬのであろうか。私は、マサカと思う。而し、太宰さんの苦悩が、(個人的、反社会的だった)という、中野氏には、太宰さんの苦しみが、それ故にこそ、現在の人間や社会一般に通じるものだと氣づかれぬのであろうか。太宰さんが、どんな苦しみの中で、「芸術とは所詮、市民の為の美の奉仕」であり、「四方の壁からヒソヒソ嘆きの聲の聞えるうちは、決して自分たちの幸福はありえない。」といつているかを、中野氏はまるで知らない。或いは、お読みなになつていないのかと思うが、読んでいない作家の悪口をいうのは、凡そ、

卑しいし、詰らぬことである。 / そして、中野氏御自身、「学生氣質」の中で、学生のストライキを頭から一蹴され、いかにも、社会的常識知識人らしく装っているが、その実の、中野氏は、(それでわからず屋の保守反動だと排斥されるのならば)光栄だという、その保守反動屋でもない。氏の正体は、戦争当時から、たゞ便乘的で、正しく、その苦悩たるや、(個人的、反社会的)なのである。 / 「学生が自分から受けとる授業をストライキするとは、果してどういふことなのか。」と、中野氏は、シタリ顔に首をひねっておられるが、コンな、世人や学生をコロリと騙そうとする、お粗末な理論は、私たちが、学生時代、軍教反対や、早慶戦切符問題などのストライキに何度となく、学校当局者側のおタイコ持ちから聞かされたものだ。 / 少数の者が、多数の者を、ほしいま、に苦しめ、自分の思い通りにしようとする時、その弱い多数者の取り得る、唯一の対抗手段は、団結であり、その団結の最高表現がストライキなのだ。それを、修業中の学生たちだから、ストライキができないというのは、それでは、学生たちから、団結の權利を奪い、敗戦後、私たちが得た、民主主義の自由を否定する事になる。 / 私は、氏の認めて下さったという、一近作からも大体、想像して貰えるように、現在、反共的と罵られている作家である。だが、その為に、私は、中野氏の陳腐な学生スト反対論に賛成し、氏を、(社会的、公徳的人物)とも、或いは、氏の自称、(偽善者)とも思っていない。私にいはせれば、氏の言動は、むやみに便乘的なことにより、極度に、個人的反社会的であり、(偽善者)とよぶのには、あまりに、その俗悪さが見えすいていて。 / これは一言でいえば、氏に、昔から

の先生根性があり、太宰さんの死もなにもかも、全て、高見の見物といった態度をとっているからであろう。こうした、人間の苦悩を、たゞ教壇から見物し、誰々、眠るナ、アクビを止めろ。俺の授業がイヤなら出てゆけ。といった、暴力的学問を尊敬し、文芸評論を書かせる編集者も、無知不見識だし、分る積りで書いている、学者の人たちも、人間と文学に対し、まるで愛情も理解もない。／だから、志賀さんが、芥川を絶望させ、織田作、太宰さんを憤死させたという、氏の御意見も、A週間誌の編集者や読者程度の、哀れなバカな俗物たちには拍手されるかも知れないが、生命ガケで小説を書いている、私たちには、たゞ、俗論としか思はれぬ。／又、「シンガポール陥落」を擔ぎだす迄もなく、志賀さんは戦争中から、最早、ボケた慾張り爺さんみたいになっていたのである。それを、太宰さんは、戦争中からよく知っていて、その戦時の長篇、「津軽」の作中で、既に志賀さんの小説を、もっと、余裕綽々にヤツつけているのである。元来、その前から、太宰さんは、志賀さんの小説を、眼と腕力だけで書いていると輕蔑していた。たゞ装幀が立派で、活字の大きい本を出すから、いつ迄も權威でいられるのだ、と軽く、あしらっていたもので、氏のいう如く、「とにかく、あれだけの仕事をした彼」などと、まるで思っていないかった。／そんな志賀さんに、太宰さんが憤死させられる筈がない。「如是我聞」をハッキリ読まれ、ば分るが、太宰さんの敵は、志賀さん御自身でなく、そんな志賀さんをいつ迄も、文壇の神様に奉っている、俗悪な、文壇、ジャアナリズムの、サロン空気に対してである。要するに、志賀さんが、太宰さんを憤死させたのではない。志賀さんを取巻いてい

る、文壇の先輩たちの空気、そうしたものに、太宰さんは我慢できず、志賀さんを引合いに出したので、この文章も、逆説的にも語られている。そして、太宰さんは、志賀さんに笑死したかも知れぬが、決して、憤死するほど志賀さんを尊敬していた事はない。／私は戦争中、志賀さんと一度、同席させて頂いた事があり、その時、志賀さんが、後輩に対し、どんなに威張っているかを、つくづく実感させられた。この「如是我聞」を書かれる動機になった、「文芸」(六月号)の座談も読んだが、中村眞一郎氏にしろ、佐々木基一氏にしろ、まるで陛下の御前で、お話相手になっていような、インギンさではないか。私たちは、もっと權威の正体を見破らなければ、戦後文学もクソもない。そして、中野教授はたゞ、權威の周囲に、うろろうろしている存在である。太宰さんの苦悩が分らねば、余計なことは書かないで欲しい。／たゞ、「ガリバー旅行記」など、氏の訳されたものがあれば、これは面白いと確信できる。

正宗白鳥「近松の心中物」(「婦人文庫」第三卷第九号「特集愛と死の問題」昭和二十三年十月一日発行)には、つぎのように記されている。

太宰は「如是我聞」と題して、新潮誌上で、しどろもどろの筆つきで荒つぽい感想を述べている。文壇の誰れ彼に向つて悪態を吐いている。周囲に唾を吐きかけてゐるやうなものだ。近松の心中物は、傍の者から悪口雑言を吹つかけてられて、へとくとされてゐた。治兵衛でも忠兵衛でも「曾根崎心中」の徳兵衛でも「宵庚申」のお千世、半兵衛でも皆悪口雑言の犠牲になつたのだが、太宰は行き掛けの駄賃に自

分の方から周囲へ毒気を吹きかけたのである。死者の態度として小氣味がい、やうでもあり浅間しいやうでもある。「芸術に於ては、親分も子分も、また友人さへ無いもののやうに私には思はれる」と断定しながら、「おまへたちは、私たちの苦悩について、少しでも考へてみてくれたことがあるだらうか」と、同情を求めるやうな泣言めいた口を利いたりしてゐる。

志賀直哉「太宰治の死」(「文芸」第五卷第十号、昭和二十三年十月一日発行)には、つぎのように記されている。

太宰君の小説は八年程前に一つ読んだが、今は題も内容も忘れて了つた。読後の印象はよくなかつた。作家のとほけたポーズが厭だつた。それも凶迂々々しさから来る人を喰つたものだと一種の面白味を感じられる場合もあるが、弱さの意識から、その弱さを隠さうとするポーズなので、若い人として好ましい傾向ではないと思つた。その後、もう一つ「伊太利亜館」といふのを読んだ。伊太利亜館といふのは昔、伊太利亜人が始めたといふ新潟の西洋料理屋で、私も前に一度行つた事があるので、その興味から読んで見たが、これは前のもの程ポーズはないが、それでも、頼まれて講演に来た事を如何にも冷淡な調子で書きながら、内心得意であるやうなところが素直でない感じがした。かういふ事は誰れにもある事で、その事は仕方がないとして、作品に書く場合、作家はもう少しその事に神経質であつてもいいと思つた。冷淡に書けば読者もその通りに受取ると思つてゐるやうなところが暢気だと思つた。／それから私は最近まで、太宰君のものは一つも読まなかつた。そして、去年の秋、「文学行動」の座談会で太宰君の小説

をどう思ふかと訊ねられ、とほけたやうなポーズが嫌ひだと答へたのであるが、太宰君はそれを読んで、不快を感じたらしく、「新潮」の何月号かに、「ある老大家」といふ間接な云ひ方で、私に反感を示したといふ事だ。私はそれを見落し、今もその内容は知らない。／今年になつて私は本屋から「斜陽」を貰ひ、評判のものゆゑ、読みかけたが、話してゐる貴族の娘の言葉が如何にも変なので、読み続けられず、初めの方でやめて了つた。続いて、「中央公論」に出た、「犯人」といふ短いものを読んだが、読んでゐるうちに話のオチが分つて了つたので、中村眞一郎、佐々木基一両君との「文芸」の座談会で、「斜陽」の言葉と、このオチの分つた話とをした。寧ろオチは最初に書いて、其所までの道程に力を入れた方がいいと話した。二度読んで、二度目に興味薄らぐやうなものは書かない方がいいとも云つたのである。この時の私の言葉の調子は必ずしも淡々としたものではなかつた。何故なら、私は太宰君が私に反感を持つてゐる事を知つてゐたから、自然、多少は悪意を持つた言葉になつた。／私は不幸にして、太宰君の作品でも出来の悪いものばかりを読んだらしい。太宰君が死んでから、「展望」で「人間失格」の第二回目を読んだが、これは少しも厭だと思はなかつた。それ故、この文章を書くにしても、私は太宰君の作品中、目ばしいものを一ト通り読んでから書くのが本当かとも考へたが、前のやうな先入観を持つてゐる私として、これは却々実行出来さうもないので、作品は眼に触れたものだけで、別に太宰君の死に就いて、自分の思つた事を少し書いて見ようと思ふ。／私は織田作之助君に就いても、太宰君に就いても、自身ペンを執つて、積極的に書くつもり

はなかつたが、座談会で、どう思ふかと訊かれると、思つてゐる事をいつて、それがそれらの人の心を傷ける結果になつた。それも淡々とした気持でいつたのではない事は、太宰君の場合は今いつたやうなわけだし、織田君の場合にも私には次のやうな気持があつた。それは、戦後、永井荷風氏の「踊子」が発表された時、私はこれがきつかけとなつて、屹度この亜流が続々と出るだらうと思つた事である。戦争中、荷風氏がさういふものを書いて、幾つかの写本にしてゐるといふ噂を聞いてゐたから、「踊子」が出た時、これはいい事だと思つたが、若い作家がこの真似をして、かういふものをつつと書きだしては堪らないとも思つた。荷風氏のものでは場面の描写にも節度があり、醜さも醜いと感じさせないだけに書いてあるが、その感覚を持たない亜流に節度なく、かういふ事を書き出されては困ると思つた。私は西鶴に感心し、モウパッサンの「メゾン・テリエ」なども愛読した方で、文学作品にさういふ要素の入る事を悪いとは思つてゐないが、節度なく安易に、それが書かれる事は我慢出来ない方である。そこに織田君の「世相」が出た。私は一昨年の夏、奈良でした谷崎潤一郎君との対談の機り、朝日の吉村正一郎から訊かれるままに、「きたならしい」と云つた。この対談は「朝日評論」に載つたものだが、その後、東京朝日の人が来ての話に、私のこの言葉だけ、織田君の爲め、抹殺して欲しいと大阪朝日から電話がかかつたが、断つたと云つてゐた。私は何れでもいいと思つたが、既に断つた後でもあり、前に云つたやうな気持もあつたから黙つてゐた。大体、世話焼きな性分で、若し織田君を個人的に知つてゐれば、同じ事も、もつと親切な言葉でいつたかも知れないが、

知らぬ人で、その親切が私にはなかつた。「文芸」の座談会での太宰君の場合は、太宰君が心身共に、それ程衰へてゐる人だといふ事を知つてゐれば、もう少し云ひやうがあつたと、今は残念に思つてゐる。／太宰君の心中を知つた時、私はイヤな気持になつた。私の云つた事が多少ともその原因に含まれてゐるのではないかと考へ、憂鬱になつた。この憂鬱は四五日続いたが、一方ではこれはどうも仕方のない事だと思つた。これを余り大きく感ずる事は自分に危険な事だとも思つた。それ故、死後発表される「如是我聞」で、私に悪意を示してゐるといふ噂を聞いた時、イヤな気もしたが、それ位の事は私も云はれた方がいいと云ふやうな一種の気安さをも一緒に感じた。／然し、私は太宰君の心中といふ事にはどうしても同情は出来なかつた。死ぬなら何故、一人で死ななかつたらうと思つた。私は広津君に太宰君の死は「恋飛脚大和往来」の忠兵衛の死と同じではないかと云つて、否定されたが、個人的に全く知らないから、主張は出来ないが、今でも私は太宰君には忠兵衛と似た所があるやうな気がしてゐる。新聞の写真で見た「井伏さんは悪人です」といふ遺書の断片を見て、井伏君には気の毒だが、忠兵衛と八右衛門の關係を聯想した。封印切りの幕で見ると、八右衛門は悪者のやうになつてゐるが、その前の忠兵衛の家の場では忠兵衛の事を本心に心配してゐるいい友達で、忠兵衛も感激し、（この感激が少し空々しいところもあるが）君は親兄弟以上の人だなど云つてゐる。それが茶屋の大勢人のある場ではまるで態度を変へ、八右衛門を悪者にしてつて、結局、小判の封印を切り、目茶苦茶になる。忠兵衛は忠兵衛、太宰君は太宰君で、滅多に同じ人間はないが、

研究する人があれば此二人の間には色々共通点を見出せるのではないかと思つてゐる。或る単なる私の聯想かも知れぬ。／自殺といふ事は私は昔は認めない事にしてゐたが、近年はそれを認め、他の動物とちがひ、人間にその能力のある事をありがたい事に思つてゐる。最近の「リーダーズ・ダイジェスト」でユーサネジア（慈悲死）といふ言葉を知つたが、自殺は自分で行ふユーサネジアだといふ意味で私は認めてゐる。然し、心中といふ事には私は今も嫌悪を感じる。相手の女は女らしい感情で一緒に死にたがるかも知れないが、その時をはずせば案外あとは氣樂に生きてゐるかも知れないし、第一、残る家族にとつて、自殺と心中ではその打撃に大変な差がある。細君にとつて良人が他の女と心中したといふ事は一生拭ひ難い侮辱となるであらうし、子供にとつて母親が侮辱されたといふ事で、割切れぬ不快な印象が残るだらうと思ふ。／然し、この事でも広津君はちがつた考へを持つてゐて、太宰君の子供が大人になつた時、太宰君の死の止むを得なかつた事に同情する時が来たらうと云つてゐたが、事実は何れになるか分らないが、私は自身の氣持から推してさうは思はない。尤も、子供が両方の氣持を持つ場合もあり得るから、何れとも片づけられない事かも知れない。／私は太宰君の心中は太宰君が主動的な立場で行はれたと思つてゐたから、一層さういふ風に考へたが、先日、瀧井孝作が來ての話では女の方が主動的だつたらしいとの事だつた。それ故、人は太宰君の心中を心中として取扱はず、自殺として取扱つてゐるわけが分つたが、兎に角同時代の所謂知識人が心中するといふ事は何んだか腑に落ちぬ事である。太宰君は一時赤になつた事もあるといふし、恐

らくそんな事はあるまいが、若し心中に多少ともイリュージョンを感じてゐたといふやうな事があれば、これは一層我慢ならぬ事である。／「新潮」の「如是我聞」は七月号のは読んだが、八月号の分は読まなかつた。私は前から、無名の端書や手紙で、悪意を示される場合、一寸見れば分るので、直ぐ火中するか、破つて棄てて了ふ事にしてゐる。批評でも明らかに悪意で書いてゐると感じた場合、先は読まない事にしてゐる。私にとつて無益有害な事だからであるが、太宰君の場合には死んだ人の事だし、読まないのは悪いやうな氣もしたが、矢張り、読む氣がせず、読まなかつた。今年十七になる私の末の娘が「如是我聞」を読んで、私の「兎」といふ小品文の中で、この娘の云つた「お父様、兎はお殺せになれない」といふ言葉の事が書いてあると云つて厭な顔をしてゐた。私は「お殺せになれない」で少しも変でない、と慰めてやつたが、「そのほか、どんな事が書いてある」と訊いたら、「シンガポール陥落の事が書いてある」と答へた。「分つた／＼」と私はそれ以上聴かなかつたが、書いてある事は読まなくても大概分つた氣がした。／兎に角、私の云つた事が心身共に弱つてゐた太宰君には何倍かになつて響いたらしい。これは太宰君には真に氣の毒な事で、太宰君にとつても、私にとつても不幸な事であつた。瀧井の話で、井伏君が二行でもいいから讀めて貰へばよかつたと云つてゐたといふ事を聴き、私の心は痛んだ。その後に讀んだ「人間失格」の第二回目で私は少しも悪いとは思はなかつたのだから、もつと沢山讀んでおれば太宰君のいいところも見出せたかも知れないと思つた。／廣津君と瀧井の來てゐた時、太宰君が崖の上に立つてゐる人だといふ事を知ら

ず、一寸指で突いたやうな感じで、甚だ寢覚めが悪いと云つたら、廣津君は「そんな事はない、そんな事はない」と強く否定して、太宰君は何の道、生きてはゐられない人だつたと云つて、私を慰めてくれた。瀧井も同じ事を云つた。そして廣津君は太宰君の自殺の一番元の原因は共產主義からの没落意識だと思ふと云つてゐた。心の面の不健康の原因には或はさういふ事もあるかも知れぬと思つた。然し、結局は肉体の不健康が一番大きな原因だつたと思ふ。／太宰君でも織田君でも、初めての頃は私にある好意を持つてゐてくれたやうな噂を聴くと、個人的に知り合ふ機会がなかつた事は残念な気がする。知つてゐれば私は恐らく病気の徹底的な療養を二人に勧めたらうと思ふ。／私は太宰君の死に就いては何も書かぬつもりであつたが、「文芸」八月号の中野好夫君の「志賀と太宰」といふ文章を見て、これを書く氣になつた。中野君の文章には非常な誇張がある。面白づくで、この誇張がそのまま、伝説になられては困るのでこれを書く事にした。／（八月十五日）

「編集者の言葉」(「文芸」第五卷第十号、昭和二十三年十月一日発行)には、つぎのように記されている。

★ 志賀直哉氏は太宰治の死について感想を寄せられた。本誌六月号の座談会と「如是我聞」に關聯して、種々の意見と憶測が行はれてゐる此の際、当事者としての志賀氏の真率な言葉は、傾聴されねばならないであらう。

神西清「ロマネスクへの脱出―太宰治の場合―」(「個性」第一卷第十号、昭和二十三年十月一日発行)には、つぎのように記されている。ぼくは太宰さんに一面識もなかつた。たしか去年のはじめ頃、会談

の機会が与へられたが、これはぼくが都合で不参してしまつた。今になつてみると心のこりである。告別式にもぼくは行かなかつたが、あとでK氏から聞いたところでは、それは頗る文壇臭のない、いかにも太宰治らしい葬式だつたといふことだ。つまり文壇の大家小家が肩をいからして(これがぼくの偽らざる印象だ)、織るがごとくに焼香するあれではなしに、会葬者は多く恥ぢらひがちの男女学生だつたといふ話である。なるほどありさうなことだと僕は思つた。太宰治の眞の人氣を支へてゐた人々が、つひに姿を現はしたのだ。数は多くはなかつたらうし、また一言の弔辞めいた文句も述べはしなかつたらう。だが彼らの背後に、太宰文学を自己の良心として生きてゐる純真潔癖な青年男女が少なからず控へてゐることは疑ひない。／彼らにとつて太宰治は決して頹廢の神などではない。恐らく俗天使ですらもない。まさしく清純無垢な唯一神であるに相違ない。「この人なければ世は闇」と言ひされる最後の精神的拠点だつたに相違ない。もし頹廢とか絶望とかいふ文字を使ふとすれば、それは全く變質せしめられた意味においてでなければならぬ。つまりその頹廢なり絶望なりを内から支へてゐる堅固な骨――その表示として頹廢なり絶望なり道化なりがあつたに過ぎない。青年たちの信頼は、あやまたずその「骨」そのものを指してゐたのだ。終戦後の日本のむざんな混乱のなかで、折れぬ心棒をもつて生き抜いた唯一人の人間らしい人間が、実は死のファンタームのごとき太宰治だつたといふことは、思へば皮肉な事実だが、事實はあくまで事實なのだ。青年の曇らない理想主義は、あらゆる詭弁的な影を敏感に嗅ぎわけるとはたつきがある。そして皮肉であらうがなから

うが、事実を事実として素直にみとめる大胆さがある。ただしこの嗅覚には言葉がないのが常なのだが。……／さうした青年（もちろん一部の青年——）にとつて、太宰治はまさに「神」であつた。小説の神ではなくて、人生の神であつた。ぎりぎり結着の生き方の「旗手」であつた。話がここまで来ると、われわれは自然にもう一つの名を思ひだすはずである。それは志賀直哉といふ名だ。食つてかかつたりかかられたりした御兩人を、ぼくが何も嫌がらせのために並べて見ようといふのでないことは、恐らく分つてもらへるだらうと思ふ。青年にとつて生き方の上の神であつたそのあり方において、この二作家には見れば見るほど深い共通点があるのだ。もちろん志賀文学がとらへた青年層は殆んどその総体ともいつていいほどであり、太宰文学の場合はこれに反して、青年層そのものも割れてゐれば、票も従つてひどく割れてゐるだらう。だがその票がおびてゐる至醇な献身性といふ点では、両者は深く共通する。／（略）志賀文学のもつヒューマニズム的センスについては、しばしば語られるやうである。だがこれまた、それ自体実にコミックな錯覚以外の何ものでもないことは明かだ。それは多かれ少なかれ、直子に脳震盪をおこさせた謙作の一突きに類するものであつた。なるほどあの謙作の一突きには血が通つてゐたかも知れないが、それはあくまで原始的な野性的な血であつて、これをしもヒューマニズムの極致であるだらう。志賀的ヒューマニズムの見本として挙げられるのは、もちろん『暗夜行路』でもなく、また右のやうな場面でもなくて、『網走まで』であり、『小僧の神様』であり、『灰色の月』である。このうち最も著しい作例である『小僧の神様』については、

太宰治が『如是我聞』のなかで、みごとにその本をつらぬく痛烈な評語をくだしてゐる。「ひとにものを食はせるのは、電車でひとに席を譲る以上に苦痛なものだ」といふのである。言ひ得て甚だ妙であつて、これ以上蛇足を加へることは無用かと思はれる。小僧に寿司を頬ばらせる志賀直哉の風貌には、槍だか太刀だかの切尖に饅頭をさして、さあ食つてみると臣下に迫つた織田信長と、外観的にはなんの違つたものもありはしない。まさにそれほどの烈しい気魄がそこにはあり、まさにそれほどの滑稽味が同じくそこにはあるのである。／ただし信長には、その肉迫の底に光るある冷やかな眼があつた。ただの征服感といつただけでは済まされぬ、ある理知的な、自己を起えた、いはば歴史の必然ともいふべきものに目ざめてゐる者の醒めたる意識があつた。志賀文学はそれすら徹底的に欠くことによつて、滑稽感を優に倍加するのである。そこにあるのはたかだか、ひとり好がりのお坊ちゃんの実に人の好い自己満足であるにすぎない。まさにそれは現代の奇蹟であつた。／『転生』といふ軽妙な掌篇が志賀さんにある。気の利かない細君をもつた男があつて、しよつちゆう肝癪をおこしてゐる。この良人にとつては「一から十までいけない、十から百までいけない」のだ。ある日細君は笑ひながら、来世には自分は出来るだけ利口に生まれてくることにするが、良人ももう少し馬鹿に生まれて来てもらひたいと言ふ。そこでこの夫婦のあひだに、では今度はひとつオシドリに生れて来ようといふ契約が成りたつ。良人が先に死んで、これは約束どほりオシドリになる。やがて細君も死んで、さて何に生まれ変わるかと思案するが、細君はさんざ迷つた挙句に、「迷ふ二つの場合が

あると、お前はきつといけない方を選ぶ」という良人の口小言を思ひだし、オシドリにならうかといふ自分の気持を抑へて、狐になつてしまふ。やがて夫婦は再会して、「なんてお前は馬鹿だ！」と、雄オシドリが女狐を又してもどなりつけるといふお笑ひである。この一場のお笑ひの中にこそ、志賀文学のぎりぎり結着の本質があるとばくは確信する。それは実に楽天的な思ひあがつた男の、実に思ひあがつた原始的な笑ひである。無自覚きはまる自己肯定の、ほとんど高天ヶ原的な哄笑である。この笑ひがたまたま昭和初年の日本といふお目出たい御代にひびいた。人々がその時代錯誤を疑ふ前に、たちまち畏怖にとりつかれてその前にひれ伏したといふのも、同じく日本の事情のほかの何ものでもなかつたのだ。まつたく白痴の健康ほどに理想的な健康が、この世のどこにあるのだらうか？／太宰治の『如是我聞』第四回は、右のような志賀文学の本質を立派にあげてゐるはずである。ただその筆者は何かの理由によつてひどく興奮してをり、説服の必須的条件である冷静さを欠いてゐることは事実であつた。だからといつてその筆者に菓鴨行きを宣告することは、すこぶる軽卒に失する。かのコミックな「人神」のコミックな手振りは、殆どあますところは捉へられ射とめられてゐるのだ。手もとは決して狂つてゐないのである。／何が太宰治をしてあれまでに興奮させ、しかもその興奮にもかかはらずその手もとを狂はせなかつたか？ この問ひに答へることは大して難事ではないだらう。それは明かに、太宰治が志賀的世界の地理の通曉者であつたことを物語つてゐる。そこには同質者どうしの間ならでは到底望むべからざるみごとに浸透的な理解があり、同時にまた、

同質者どうしの間に避くべからざる烈しい反撥があつたわけである。「汚はしい、すさをらう！」」なにを小癩な、さういふお前こそ……」これでは論争にも何もならぬではないか。夫婦げんかは犬も食はぬといふのは、まさにこのことである。／もとより志賀的個我は、いかなる意味の危機にも曾てさらされたことのない全国的な、いはば自然鉱のごとき個我であり、これに反して太宰的個我は、何ものか怖るべき天変によつて破碎しつくされたところの、殆ど熔岩のごとくに飛散する個我である。いはば個我の碎片である。その限りにおいて、両者は全く裏はらな性質をもつものであるが、しかも全国的にせよ碎片としてであるにせよ、その個我それ自体の絶対的専制といふ事の本質においては、両者のあひだに一分一厘のずれもありはしない。ともに典型的なお坊ちゃん芸であり、ともに純粹無垢な自意識の饗宴であり、ともに何としても憎めない原始的人間性のほがらかなお神楽である。通説によれば、志賀文学はあくまで健康正常であるに反し、太宰文学はあくまで不健康かつ類廢的だといふことになつてゐる。だがこれは、ほんの見せかけにすぎない。志賀文学を試みに裏返しにして見たまへ。自足せる怠惰といふ形における類廢性は、見るもむざんなほど露はになるだらう。同様にして、太宰文学を試みに裏返しにして見たまへ。／分裂にもめげずあくまで自意識を貫かうとする超人的な健康さは、われらを失明させるに足りる光耀をもつてぎらぎらと輝き出るだらう。誰が志賀直哉のやうに陽性に強くあり得たかといふ問ひは、必然的に、誰が太宰治のやうに陰性に強くあり得たかといふ問ひとなつて撥ね返らざるを得ない所以である。真に日本的な私小説が、志賀

直哉においてその興隆の絶巔をしめし、太宰治においてその没落の真底をしめしたといふのは、決して偶然ではあるまい。まぎれもなく日本の私小説は、太宰文学によつて燦爛たる終始符を打たれたのである。もはや太宰文学のあとでは、日本にふたたび私小説の復活を見ることはないだらう。

小林秀雄、正宗白鳥「大作家論(対談)」「光」第四卷第十号、昭和二十三年十月一日発行)には、つぎのように記されている。

小林 太宰治という人も、ちつとも知らないでいましたが、この間ああいう事件があつて、好奇心にかられ、初めて読みました。／正宗 僕はあの人のものはおもしろいと思つてときどき読んでたんだ。あの仲間ではあの人のものが一番読みやすくてね。——それでも、長いものは読んでいない。大して重い意味でおもしろいと思つたじやないけども、「嘘」というのを最初読んだな、あれはおもしろいと思つた。女の嘘の気もちを書いたものでね、あれは女をよく知つていると思つた。モウパッサンでも書きそうなことを書いてた。／小林 それは読まみませんでした、あの人の文章は特色あるものだと思つた。／正宗 この頃の人の中じや、あの人のはおもしろいと思つて、僕はちよいちよい読んでた。そんなにも読まないけど。／小林 やつぱり人間が變つてゐるんでしようね。それが文章によく出て生きてゐる。あのくらしい気性のよく出た文章は少いでしよう。あの人の文章を読んでみると、僕の感じでは、一見観念的だが、実は非常に肉体的ですよ。だから、太宰の言つてゐることはわからなくても、人間のヘンな体臭ね、これはわかるんです。それだけで売れますね。素質を充分に發揮してゐるが、

性格の発見がないといった感じがしました。ただの才能ではないですね。／正宗 それはそうかも知れない。／記者 太宰氏が、志賀さんの「灰色の月」のなかの「東京駅の屋根のなくなつた歩廊に立つてゐると、風はなかつたが、冷え冷えとし、着て来た一重外套で丁度よかつた。」という文章を、やつつけてゐる点ですが……(後記——この文章を評して太宰氏は、「馬鹿らしい、冷え冷えとし、だからふるえているのかと思ふと、着て来た一重外套で丁度よかつた、これはどういふことだらう。まるで滅茶苦茶である。いつたいこの作品には、この少年工に対するシンパシーが少しも現はれてゐない。つっぱなして、愛情を感じせしめやうといふ古くからの俗な手法を用ひてゐるらしいが、それは失敗である。しかも最後の一行、昭和二十年十月十六日の事である、に到つては噴飯のほかない。もう、ごまかしが、きかなくなつた。」「新潮七月号「如是我聞」〕と書いてゐる。——「光」編集部)／正宗 あれは神嘗祭のころですよ。だから時候としては……／小林 あれはウソが書いてないです。／正宗 それをウソだといつてる。／小林 太宰は、そんなことを書くのはいやだといつてるのですよ。／正宗 それじや読んで見たまえ。／小林 あなたの読み違いですよ。／正宗 いや、きみの読みちがいだ。／小林 なぜ「ちよほどよかつた」んです。／正宗 十月で今日は寒いから、「ちよほどよかつた。」「……」／小林 それが怪しからんのでしよう、太宰は……。／正宗 怪しからんこともないな。／小林 ひもじい人に同情する奴が、なんでそんなときに、寒くもない、暖くもないような外套を着てちよどよいいなんでいふのかつて、言つてゐるんです。／正宗

あ、それじや書き方が違う。／小林 あの文章を読んで、僕はそう思ったのですよ。それ以外には思えなかつた。／正宗 それは読んで見ればわかるな。／小林 太宰つていう人はバカじやありません。ヒステリイです。バカとヒステリイは違いますからなあ。ヒステリイにはヒステリイの智慧がある。志賀直哉という人を亭主閑白に見立てた、あれは文章だと思つたです。あのくらい素質をぶちまけた文章は珍しいですな。素質の氾濫なのです。礼を失したとかなんとかそんなつまらんことではない。つらい話です。文士稼業もつらいことつたという事です。／正宗 よく読んでみなければわからない、まだ……。

「お殺せなさいませ」は。／小林 ちつともかまわないですよ。それ自身として、ちつともおかしくないと思います。／正宗 ぜんぜん貴族の言葉になつていない、と太宰はいうんだけれど。／小林 それはわかります。しかしそんなことは、おもしろくもない問題です。正宗白鳥さんみたいな運の強い人もあります。太宰のような不運の人もあります。それだけのことで、僕はほかに認められないですよ。

横田俊一「ゲヘナの罪人―太宰文学論」(「大和文学」第三輯、昭和二十三年十月二十五日発行)には、つぎのように記されている。

私の苦悩の殆ど全部は、あのイエスといふ人の「己れを愛することく汝の隣人を愛せ」といふ難題一つにかかつてゐると云つてもいいのである。「如是我聞」／私もかつて太宰治論を「おのれのごとく汝の隣を愛すべし」(「マタイ伝」二十二章)の一句に、その全部を賭けようとした。太宰みづからも、この一句について「これが私の最初のモットーであり、最後のモットーです」(返事)と言つてゐる。この一句

においては、自己愛は隣人愛と等式で結ばれるのだが、太宰の文学は、まづ卍(卍)淵(淵)として出発する、自己劣等感の負目とともに。自己を凌辱すればするほど、隣人への愛が純粹になると思ひこみ、哀れな道化を演じたのである。三十歳ごろから、やつと、自己をも愛さなければいけないと思ひだしたものの、もともと人間はたうてい、自己を愛し切るものではない、まして、病的でさへあつた羞恥心と、私は幸福であつてはならない、私には神の罰しか与へられないと頑固に思ひこんである自己罪障感とが、太宰に対しては、いつも自己否定的に働いてゐた。この一句は、第一の誠命「なんぢ心を尽し、精神を尽し、思を尽して主なる汝の神を愛すべし」によつて成立してゐる第二の誠命なのである。だから、太宰は、第一のいましめに至ることによつて、かれの最初にして最後のモットーを成就することができたのであるけれども、かれは、神の信者と成り得ないで、神の存在に脅え、神の冥護を求めてゐながら、なほ深淵にありて、救はれない人々を押しのけて、自分だけが救はれようとはしないのである。／——おそろしいのはね。この世の中の、どこかに神がある、といふことなんです。ゐるんでせうね? (「ヴィヨンの妻」)／世界に、たゞ一人でも、救はれない不幸な人があるかぎり、芸術家の魂は平安であることができない。かれの胸に疼くのである。ほくは、このやうな人を芸術家と思つてゐる。太宰は、このやうな人であつた。だから、天国の平安よりも、ゲヘナの劫火に焼き亡ぼされてしまつたのである。やんぬる哉。

小田切秀雄「太宰に対しての志賀―文学上の対立の問題について―」(「文芸」第五卷第十一号、昭和二十三年十一月一日発行)には、つ

ぎのように記されている。

志賀直哉が太宰治について書いた文章（『文芸』四八年一〇月号）は、その題名からも知られる通りに「太宰治の死」についてであつて、太宰のこれまでやつてきた仕事についてはない。そして、「……この文章を書くにしても、私は太宰君の作品中、目ぼしいものを一ト通り読んでから書くのが本当かとも考へたが、前のやうな先入観を持つてゐる私として、これは劫々出来さうもないので、作品は眼に触れたものだけで、別に太宰君の死に就いて、自分の思つた事を少し書いて見ようと思ふ」というわけで（志賀の「眼に触れた」太宰の作品は八年ほど前のもの一つと「伊太利亜館」と「人間失格」第二回とだけ過ぎぬ）、太宰の仕事の性質、その結果としての死についてでなくそれとは「別に、太宰君の死に就いて」書くことになつてゐる。しかも、この「太宰君の死」はもつぱらその心中したという点でとりあげられ、心中については志賀は、「心中といふ事には私は今も嫌悪を感じる。……兎に角時代の所謂知識人が心中をするといふ事は何んだか腑に落ちぬ事である。太宰君は一時赤になつた事もあるといふし、恐らくそんな事はあるまいが、若し心中に多少ともイリュージョンを感じてゐたといふやうな事があれば、これは一層我慢ならぬ事である」といふ。／太宰治などまるで歯牙にもかけていない志賀直哉のつらだましいがここに遺憾なくうちだされることになつてゐる（同時にそれはもはや太宰をなんらかの形で問題にし得るやうな地点から志賀がすっかり離れ去つてしまつてゐることを示す）。こんどの志賀の文章自体、モチーフはもともと太宰の何かに触発されてのものでなく、文末の、「中野（好

夫）君の文章には非常な誇張がある。面白づくで、この誇張がそのまま、伝説になられては困るのでこれを書く事にした」という一句のとおりであらう。そうでなければ、右のような志賀が「太宰治の死」についてわざわざ一文を草する理由はどこにも見当らない。もつとも、「太宰君の心中を知つた時、私はイヤな気持になつた。私の云つた事が多少ともその原因に含まれてゐるのではないかと考へ、憂鬱になつた。この憂鬱は四五日続いた……」というようなことが志賀になつたわけではない。しかし四五日も続く憂鬱は感じてゐても、べつに「太宰君の作品中、目ぼしいものを一ト通り」読むことなど決してしはしないばかりか、志賀をして「私の云つた事が多少その原因に含まれてゐるのではないか」と推定させることになつたその直接の根拠たる「如是我聞」の絶筆の部分（『新潮』同七月号）をも、自分では手にとつて読むことをせず、家族の一人に『そのほか、どんな事が書いてある』と訊いたら、『シンガポール陥落の事が書いてある』と答へた。『分つた』と私はそれ以上聴かなかつたが、書いてある事は読まなくても大概分つた気がした」といふ調子で片付けてしまつてゐる。／こんなにも志賀が太宰を軽くあしらつてゐることの原因には、太宰の側の責任もみのがすことができなない。太宰は志賀を敵として攻撃しながら、その敵に向つて、自分は「誇張でなしに、血を吐きながらでも、本流の小説を書かうと努め、その努力が却つてみなに嫌はれ、三人の虚弱な幼児をかかへ、夫婦は心から笑ひ合つたことがなく、障子の骨も、襖のシンも、破れ果ててゐる五十円の貸家に住み……」などと書いて事実上甘えることになつてゐる。「さうして、この志賀直哉など

に抗議したおかげで、自分のこれまで付き合つた先輩友人たちと、全部気まづくなつてゐるのである」とさえ付け加えているありさまだ。しかも、いったい太宰の「先輩友人たち」はその「全部」が志賀攻撃の故に太宰と「気まづく」なるような人物ばかりであつたのだろうか、という疑問は免れがたく、誇張した言い方がもとも太宰のスタイルそのものに関係してはいるとしても、たたかう相手を前にして感傷的言辭を弄しているという事実は否定することができない。また、この絶筆の最後の一句は、「……ヤキモチ。いいとしをして、恥しいね。太宰などお殺せなさいますの？ 売り言葉に買ひ言葉、いくらでも書くつもり。」というのだが、「いくらでも書くつもり」と結んだ文章がほかならぬ絶筆になつてゐるのでは、相手にされた方で気が抜けてしまわざるをえないようなものだ。いくらでも書くつもりなら、「いくらでも書くつもり」などと書くかわりにじつさいに何度も何度も書いて必要なだけ食い下ることが必要であり、ひとたび攻撃にたち上つたのなら敵に甘えたり感傷的になつたりする代りに、もしどうしても骨にまで切りこめなかつたらせめてカスリ傷一つでも負わせてくるのである。なければたかひにはならぬ。太宰のスタイル、感受性や思考方法が、すでに自己の敵とするものについて正面切つたたかひを行うに堪ええぬものとなつていたことは考えられねばならぬにしても、それでもひとたびたかひにたち上つたら相手に痛痒を感じさせないようなたかひぶりではお話にならぬ。こんな太宰の調子では、志賀が問題にするに足らぬと感じたとしてもやむを得ないということにならざるを得ない。／「如是我聞」の志賀批判がまるで志賀の弱いところを衝

いていないのではない。それはすぐれた批判の数をふくんでさえいる。たとえば、「その作家の生前に於て、『良風俗』とマッチする作家とは、どんな種類の作家か知つてゐるだらう」、という部分など、こんどの文章で志賀が太宰の死をただ「心中」としてだけとりあげてこれをこきおろしている様子（なんとそれは『良風俗』とマッチしているだらう！）によつても実證されている通りのもので、「良風俗」にたいする太宰風の対立の仕方が、そのまま肯定さるべきものであるかどうかは別として、「暗夜行路」以後の志賀の進み方の結果しているもの——最近でいえば芸術院会員として志賀のいわゆる「天子様」と歎談を重ねるにいたつてゐることをふくめて——を正當に衝いてゐる。だが、こうした部分のいくつかがなくはないにかかわらず、攻撃に當つてさきに挙げたような態度がこちらにむき出されてゐるために、攻撃力は實際上にぶらされ、太宰風にいえば「てれて、醜態」ということになつてゐる。そこでその結果は、志賀をして、「シンガポール陥落の事が書いてある」「分つた〜」「私はそれ以上聴かなかつたが……読まなくても大概分つた気がした」、という高飛車な態度に出させることになつて具体的に現れる。そしてこの、「シンガポール陥落の事が書いてある」「分つた〜」は、志賀においてそうであるより読者の側の感想としてスラリと通るのである。というのは、志賀自身かつて「シンガポール陥落」という文章を書き、それを戦時中出した本のなかに収めもしたことについて、戦後いつたいどう考へているのかということ、そのこと自体に関する限り「分つた〜」ではすまないこの内面的な問題については志賀は何も書いていないこと、この

ことが志賀にたいして問題とならざるを得ないという意味では決してスラリとは行かないが、「シンガポール陥落」についての太宰の触れ方、取上げ方については、読者の側としては「分つた／＼」といわざるを得ない理由をもっている。それは、ひとさまの戦争責任どころではない太宰自身の戦争下の作品のことだ。所謂日華事変の直後に行われた「満願」による太宰の転向——この人生によい美しいものがそれとしてあり得るという明るい態度に変わっていった行き方が、まさに時代の厭力に強いられるものとしての性質を多分にもつていたことは戦後ふたたび「晩年」や「虚構の彷徨」の世界に本質上逆戻りしてしまつたことから明らかだが、それだけに太平洋戦争開始の以後に書かれるようになった「故郷」・「新郎」・「佳日」等一連の習俗復帰の小説、たとえばその一つとしての「故郷」（「新潮」四三年一月）についていえば、これはかつて作者がそこからはみ出てきた故郷の母や兄たちの古い「家」へひたすら恐縮しながら足ぶみさせて貰うようになることを書いて、太平洋戦争下の権力から押しつけられた「良風俗にマッチ」して行くための蕩児帰るの小説であり、終戦近くなつてからはまた変つたがそれまではともかく太宰自身この種の作品のいくつかを書いたのであり、太宰が「婦人公論」に書いていた「十二月八日の記」はいまわたしの記憶が正確でないので触れぬにしても、とにかく「シンガポール陥落」というたぐいの文章は一度書いただけでやめてしまつた志賀にたいして、太宰は右にあげたような作品のいくつかを書いていふことを読者の記憶のなかから消し去ることはできない。わたしたちは太宰の書いたこれら「シンガポール陥落」をそれぞれ切りはなして

問題にすることは正しくないと考え、文学者の戦争責任の追求にあつてもいふまでもなく太宰はむしろその逆の方に近いとしていたが、いま太宰が自分のことはすつかり棚に上げて志賀のただ一つ書いた「シンガポール陥落」だけをとつこにとつて攻撃するならば、それは読者としてまつたく「分つた／＼」ということにならざるを得ない。太宰がここまで取り乱し、取り乱すことの大向うめあての効果までもどれほどか意識していたに相違ないとすれば、それをスラリとは受けとりがたい読者にとつて志賀の「分つた／＼」がスラリと受けとられやすいことになつてしまふのを免れることができぬ。——志賀と太宰という二人の作家を全面的に比較評論するのがここの目的ではない。ただ二つの文学的個性がかなりにはげしくぶつかり合ったことの場合が、実際上はどれほどの火花をも発し得ないで終つてしまつたことについての、「面白づく」で論じ得るところかひどく興奮めな事実について述べておきたかつたに過ぎない。そしてこの興奮めな事実こそ、戦後の低迷をまだどれほどもさわやかに破つていつていないこんにちの文学の世界の、その深部にひそんでいる問題の一つにかかわつていふと思われるのである。／＼志賀直哉はこんどの文章の終りの方で、「……そして広津君は太宰君の自殺の一番元の原因は共産主義からの没落意識だと思ふと云つてゐた。心の面の不健康の原因には或はさういふ事もあるかも知れぬと思つた。然し、結局は肉体の不健康が一番大きな原因だつたと思ふ」と書き、太宰とも織田作之助とも自分は個人的に知り合う機会がなかつたが「知つてゐれば私は恐らく病気の徹底的な療養を二人に勧めたらうと思ふ」と書いていふ。太

宰の死の「一番大きな原因」を病氣と断定し、太宰と織田とにたいして「病氣の徹底的な療養」ということをもちだしているのは、志賀は現に生きていてこのような文章を書き、これにむかつてもはや太宰も織田もその不「療養」の結果として反撃の機会を自分から喪失してしまつてゐるという意味で太宰・織田の実際上の敗北にほかならない。だが、それにしても、太宰や織田が意図したところ、そのために生命を浪費させしめたところのものについて、志賀はなんと一顧をもしようとしていないことだろう。すでに見てきただけでも太宰にいろいろの弱みがあり、織田の場合もつとひどかつたということがあるにしても、志賀が太宰と織田とにたいしてとつた態度は、佐々木基一・中村眞一郎との座談会で太宰たちよりもつと若いこの二人にたいしてとつた態度と同じであつて、友好的とそうでないとの違いはあれ、いずれも若い世代たちの文学上・人生上の切実な関心にもはや全く触れ得ないばかりでなく進んで理解しようとするだけの努力をも示さないでしまつてゐるほどにも倨傲な自信にふくれ上つてゐることを示してゐる。しかもこの自信は、谷崎潤一郎のようなひとたちとのたびたびの關係（戦後志賀の出ている座談会はたいていこの種のものだ）、あるいは、高峰秀子が訪問しての談話（「オール読物」同五月号）などに自己を浪費することはいとわななくとも、文学上・人生上の新しい領域を開くための努力として現れたことはほとんどない。そこで、太宰のことばをひけば、「いつたい何だつてそんなに、自分でえらがつてゐるのか。自分ももう駄目ではないかといふ反省を感じたことがないのか。強がることはやめなさい」（「如是我聞」）、ということにならざる

をえないわけだが、一方志賀の方がそのようであり、他方太宰や織田が仕事そのものによつて志賀を事実上「駄目」にさせてしまふようなものを書いて行く代りに死んでしまひ、佐々木や中村もなかなか慙だというのでは、これでは世代と世代、文学上・人生上の立脚点と立脚点との間の、はげしいかみ合いによるそれぞれの本当の發展ということがでてくるはずがない。こうした状態は、最近の民主民族戦線をめぐるモダニズムと民主主義文学との間にも見出される。脅されはじめてゐる平和と民族の運命のために両者が手を結び合うことは切実な必要であり、それは善くかつ美しい故に何人もこれに水をさすことを許されぬが、このために文学上の対立をまで解消あるいは文学休戦というような状態にもつてゆこうとするのは、それぞれの眞の發展に水をさすものであり提携を單なる利用關係に陥れ易い。対立する部分をはつきりさせ合うことで手を握り得る部分をも明らかにしつつ、それぞれ自らの立つ文学上・人生上の足場をつきつめることにおいて相互の批判に進みながら、共通の敵ファシズムとのたたかひにおいては實質上有効な提携の仕方を進めるといふのでなければならぬのに、現状においては一部に文学上の批判までも避けてゐるような澱んだ空氣があり、ちよつと志賀たち古い世代の「自信」を吹き払いえないのが主としてより若い世代たちの責任であるのと同様に、いまのべたような澱んだ空氣に対しては提携を申しでた民主陣營の側に文学的に責任をとる必要がとくにあると思われる。／＼なおいわゆるアプレ・ゲールのひとたちと早稲田派風の風俗主義リアリズムとの間にも、後者の側からの混合戦があるだけで両者の間の対立をつきつめるいとなみは行

わかれておらず、以上ひつくるめてこんにちの文学界には一般にはげしい批判・抗争による発展というものがなく、立場の上で深い対立がないわけではないのにたたかいて一方のエネルギーが他方のエネルギーを駆りたてるといふおもむきに乏しい。このことは、民主主義文学とモダニズムと風俗主義リアリズムとがそれぞれの文学として鼎立しながら、そのどれもが自己を支配的な文学潮流とし得るまでに強力にはなっていない状態と関連して、歴史と人間との発展に最も密着した立場にたつ民主主義文学こそ新たな発展の段階を創ることをまず要求されないではない。／——たまたま示されることになつた志賀と太宰との関係の仕方は、わたくしたちにこのようなことを語りかけるのである。

船山馨「無神救済——太宰治について——」（『不同調』第二卷第十一号、昭和二十三年十一月一日発行）には、つぎのように記されている。

太宰治が死ぬ二三日前、私は人に「如是我聞」は書かでものことだと話したばかりであつた。あれは太宰治の仕事になにもをもプラスしない。あれはピンからキリまで云ふ必要も書く必要もないことだけが、書かれ、云はれてゐる。作家が自作にたいするいかなる批評にたいしても、応へることの無意味さは、太宰自身が最もよく知つてゐる一人であらうし、まして批評にもならぬ下司な毒舌や、卑しい嫉妬からの中傷にたいして、こちらもたんなる毒舌を酬いて腹いせをしてゐるやうな箇所すらあるのは、見苦しい。ほかの人ならともかくも、これまでいかなる批評にたいしても口を緘じてき通した太宰が、こんな文章を書いてゐるといふことは、なにか、深い衰弱があり、敗北的で

あり、死の予感がある、といふやうなことを、その時私はしやべつたのであつた。／けれども、いまになつては「永居するだけ皆を苦しめ、こちらもくるしく、かんにんして被下度」といふ遺書の一節が、そのひと言のなかの千万の涙が、私を恥かしめないではるないのである。「自分はこれまでの生涯に於いて、人に殺されたいと願望したことは幾度となくありましたが、人を殺したいと思つた事は、いちどもありませんでした。それは、おそろべき相手に、かへつて幸福を与へるだけの事だと考へてゐたからです。」（『人間失格』）死といふものをこのやうに考へてゐる人間にとつては、死は生きることより容易であり、むしろ生きることが贖罪の業苦であつたであらう。たしかに、太宰治にとつては自殺がつねに唯一の可能性であり、その可能性と手をつないでゐることによつて、辛うじて悪臭紛々鼻もちなぬ人間悪のなかで生きて来つづけたのであつた。自殺はこの作家にとつての必然であつたらう。

尾崎一雄「志賀文学と太宰文学」（『作品』第二号、昭和二十三年十一月十五日発行）には、つぎのように記されている。

私は、太宰君の「如是我聞」を読んで、気の弱い人の、命をかけた激発だと思つた。ひどく気の毒になり、あれを書く（口述にしろ何にしろ）ときの太宰君の胸中を思つて、実に暗い憂うつを感じた。うし、のとき詣りをする女の、しんいの炎に燃えるつり上つた眼を思つた。／あれは、書かれない方が好かつた、とつくづく思ふ。あれは、逆上した人間が、盲目滅法、刀を振り廻したやうなもので、相手にはカスリ傷一つ与へず、自分で勝手に血を流してゐるやうなものだ。まこと

に無残である。／志賀直哉だつて、よも神ではあるまい。突くべきス
キを狙つて、文学論を展開すれば、必ずどこかに切りつけることは
出来る筈だ、あいにく太宰君は、論は不得手のやうだが、志賀直哉だ
つて、何も文学理論の網を張り廻してゐるわけでもない。(そんなこ
とを必要としないのが、この人の強味なのだ) 何か因縁はつけられ
る筈である。それをやらずに、文壇始まつて以来(いつ始まつたのか
は知らないが)とも云ふべき、はしたない言葉の撤布、悪口雑言のあ
りたけを太宰君は吐いた。私は、酒や麻薬が彼をあそこまで押しやつ
たのだと思ふ。しかし、さう思つても、救はれはしない。／太宰君は、
志賀直哉を、尊敬してゐた。このことは、昔からの彼を知つてゐるも
のは、みな知つてゐる。また、志賀直哉にほめて貰ひたかつたでもあ
らう。尊敬してゐる人からほめて貰ひたいのは、自然である。／しか
し、ほめて貰へなかつた。反対に、軽くではあるが、不評を受けた。
屈辱感の集積が、ついに激発して、『如是我聞』になつた。／私は、『如
是我聞』の中の言葉を一つ一つ捕まへて、その当らざること、また、
太宰君が欠点として挙げた二三のことは、却つて志賀文学の長所であ
ることなど、肚の中では、はつきり考へもまとまつてゐるのだが、文
章としてここに書くことは出来ない。それは、『如是我聞』の中の言葉
が余りキタナイから触れたくないのである。／志賀直哉は、「日蔭者
の苦悶」や「弱さ」が解らぬ人ではない。しかし、それを否定する人
である。殊に、わざと陽蔭にもぐり込まうとしたり、自ら弱さに甘た
れたりする自虐者流を嫌ふのである。弱さの変型たる強がり、さへも嫌
ふ。まともな、何気なさを好しとする。すべてわざとらしい、ひねく

れたものを嫌ふ。裏口、わき道、間道といふやうなものを嫌ふ。真直
ぐなものを好しとする。しかし、簡単に、平板にさうなのではない、
ものごとや事情がそこへ達するまでの曲折が解らず、知らぬ、といふ
のではない。志賀文学が、簡潔で直截な表現を有ちながら、暗示と深
みに富むのは、そのためである。曲折は根として地下にかくされ、幹
や枝や葉や花が典雅端麗である。／太宰治には、狂ひ咲きの美しさが
ある。狂ひ咲きでも何でも、美しいといふことは、なみ大いなこと
ではない。太宰治は、数少ない日本の美しい花の一つだ。けれども、
彼の芸術は、それだけで一本立ちといふには、どこか危なかつかさ
がある。一方にまともな、正統的なものがあり、何らかの形でそれに倚
りかかるか、からみつくか(反撥の形になつても事情は変らない)し
ないと、ふらふらする、といふたちのものだ。それは、畸形的であり、
不整形である。——このことは、彼の作品の技術面、仕上げなどを云
つてゐるのでなく、その手前のことについてなのは、云ふまでもない。
／いかに太宰治が、血相変へて志賀文学の悪口云つても、われわれは
動かない。志賀直哉の文学は、われわれに、生きることの好き、とい
ふものを吹き込んでくれるからだ。ことは極めて簡単なのである。究
極に於て、生きることの好きを吹き込んでくれる、——文学に、これ
以上の、何をわれわれは望めるだらうか。／太宰君は、道の端の方を
歩いてゐた。歩き方は独特であり、ハデでもあつた。彼は人目につき
喝采を浴びた。彼は、だんだんと危ない芸術を始め、とうとう足すべ
らして落ち込んでしまつた。谷底へ。／太宰君に現はれた「危なさ」
といふものは、芸術道本来のむづかしさ、それを乗り越え進む冒険、

それにとまなふ危険、それとは少し色合ひの違ふところがある。何か余分な、まともでないものが加はつてゐるやうだ。／太宰君に、もつと自信が欲しかったと思ふ。志賀直哉に悪く云はれたつていいではないか。志賀直哉は志賀直哉、俺は俺、と何故肚を握えることが出来なかつたのか。「ヤキモチ」などと叫ぶに至つては、その言葉がね返つて自分自身の心臓を貫いてゐることに気づかぬ取り乱しかたを、ただ悲しいと思ふばかりである。逆上して、愚にもつかぬことをわめき散らすなど、あれでは織田の方がまだしも「よくやつた」と云へるだらう。／志賀先生は、『文芸』の十月号に、『太宰治の死』といふのを書かれたそうだが、私は未だそれを拝見してゐない。今月は九月二十八日だが、寄贈誌が未着なので、子供に小田原の本屋を見させたが、未だ来てゐないとのことだつた。それを拝見すれば、私はまた教へて頂けるところ多大であるに違ひなく、ここでも、もつと筋道立つたことが云へると思ふが、残念である。／(略)／志賀直哉のは素人文学、檀那芸だ、と、これは太宰君が叫んでゐるが、これは一寸面白い云ひ方だ。太宰君のは、どつちかと云へば文学から生れた文学である。謂はば、縮少再生産的文学である。又は、一種の温室文学である。現実を生きる、といふことに於て、どこかまともでないところがあつたやうだ。現実といふ大地につける彼の足のうらは、薄くて過敏で、だから直ぐ皮がむけたり、マメが出来たり、——一寸見ると、現実を相手に大格闘を演じてその挙句敗れた、といふふうに見えるけれども、始めから弱いのである。したがつて、彼の敗戦の状況がひどく悲壯に見え、太宰君の一友人など、私に便りをよこして「太宰、あつぱれ、討

死した」などと云つて来たほどだが、ああいふ生き方をまともとは、私には思なへい。足でちゃんと立つて歩くのが人間なのだ。それから文学なのだ。／文学温室から、時々手を出し、足を出し、手や足が弱いから当然ひどい目に逢ふ、その苦痛や悩みをうたひ上げる、といふふうな太宰君から見れば、現実にちゃんと立つてゐて、そこから直接自分の文学を晶華させる(いはゆる現実密着の意味ではない)といふ志賀芸術を、素人文学などと云ひたくなるのは一応判るが、再応となると間違ひなのである。文学中毒患者太宰治の偏見に過ぎない。

〔付記〕 初出誌所掲の「編集後記」には「太宰治氏のエッセーは一ヶ年間連載するが、これは読者の期待以上のものとならう。」とある。初出誌は、「昭和廿三年二月廿八日印刷納本」「編集兼発行者齋藤十一」

「発行所／東京都新宿区矢来町七一／株式会社新潮社」である。

小説の面白さ・個性・三月号、第一巻第三号・昭和二十三年三月一日発行・38頁・39頁・「アンケート／小説とは何か」欄

『如是我聞』(新潮社、昭和二十三年十一月十日発行)に、全文収載された。

『太宰治全集第十六巻もの思ふ葦(近代文庫23)』(創芸社、昭和二十七年七月一日発行)に、全文収載された。

〔同時代評〕 樽崎勤「太宰治氏への手紙」(『文芸時代』第一巻第八号)「太宰治追悼特集号」昭和二十三年八月一日発行)には、つぎのように記されている。

しかし、このやうな手紙を、あなたにあてて書いてゐながら、私はまた、あなたの書かれた「小説の面白さ」といふ一文をも思ひうかべ

てゐるのです。さうすると、私は、このやうな手紙は書くのではなかつた、書いて何んの足しになるのか、と、ふいに、書くことに躊躇をおぼえてくるのでした。／「小説と云ふものは、本来、女子供の読むもので、いはゆる利口な大人が目の色を変へて読み、しかもその読後感を卓を叩いて論じ合ふと云ふやうな性質のものではないのであります。小説を読んで、襟を正しただの、頭を下げただのと云つてゐる人は、それが冗談ならばまた面白い話柄でもありませんが、事実そのやうな振舞ひを致したならば、それは狂人の仕草と申さなければなりません。／これは、その「小説の面白さ」の書出しの一部分ですが、かういふことを、ぬけぬけといはなければならぬところに、あなたの気の弱さを見出ださずにはをれないのです。私は、やはりあなたの作品の愛読者であり、ときに、「狂人の仕草」の真似をもして、ピント外れの読後感ものべたてゐるのです。それにしても、女子供の読むものを書くために、呻吟、苦吟、慘澹として、原稿紙に字を埋めるといふところに、得もいはれぬ妙味をおぼえるのは、ほかならぬ作者であることも確かです。／私は、女子供のなかに伍して、これからも、あなたの作品を目の色を変へて読むことでせう。どうか、目の色を変へて読むやうな小説を、書いて下さることを念じて止みません。

〔付記〕 初出誌は、「一九四八、一一、二五印刷」「編集兼発行者 東京都千代田区代官町二国際文化会館 株式会社思索社内 片山修三」で、「アンケート」の「小説とは何か」欄には、豊島与志雄「或る小説家の言」、椎名麟三「素朴なる賭博者」、太宰治「小説の面白さ」、徳永直「『ヨーロッパ派』について」の諸作が掲載されている。

第一巻後記・屋根の上のサワン井伏鱒二選集第一巻・筑摩書房、昭和二十三年三月二十五日発行・319頁327頁

『如是我聞』（新潮社、昭和二十三年十一月十日発行）に、『井伏鱒二選集』後序―井伏鱒二のことの題で、全文収載された。

『太宰治全集第十六巻もの思ふ葦』（近代文庫23）（創芸社、昭和二十七年七月一日発行）に、『井伏鱒二選集』後記の題で、全文収載された。

〔同時代評〕 山本和夫「太宰治覚え書」（『文芸首都』第十六巻第八号、昭和二十三年八月一日発行）には、つぎのように記されている。

太宰氏は、彼の稟性によつて作品を書いた。足掻いた。呻いた。そして芥川氏の感化と、天才的宿命によつて自滅を急いだ、では、足りぬものがある。彼の文学の周辺に、井伏文学がある。井伏鱒二選集の第一巻の後記に、太宰氏はかう書いている。／「二十五年間？ 活字のあまりではないだらうか。太宰は、まだ三十九歳の筈である。三十九から二十五を引くと、十四だ。しかし、それは、決して活字のあまりではないのである。私は十四のとしから、井伏さんの作品を愛読してゐたのである」／彼は遺書（破いてあつたが）に「井伏さんは悪人です」と書いたといふ。それ程に、井伏氏と彼は一つになつてゐたのである。彼は小説にも、私は悪人だとか、私は馬鹿だとかぐうたらだとか、さういつた自虐的な言葉を書き放つ。遺書で「井伏さんは悪人です」と書いたところで、井伏氏にうらみがあつたわけではあるまい。さうではなく、いつもの自虐的発作であり、それは井伏さんが彼の肉体の一部であるかのやうに、近くにゐた證據となるものであつた

らう。／太宰氏は、芥川の宿命の道を歩んだとしても、彼の文学は、井伏文学に支えられてゐた。また「人間失格」の中にも、本当の友人はゐないことを述べてゐるが、井伏氏は、その代りに生活の心棒になつてゐたのではなかつたか。また、そのことを太宰氏はその選集の後記にはつきりと書き残してゐる。／太宰氏が、十四歳のとき、井伏氏の作品「山椒魚」を発見したのであつた。／二十五年前、あれは大震災のとはなかつたかしたら、井伏さんは或るささやかな同人雑誌に、はじめてその作品を発表なさつて、当時、北の端の青森の中学一年生だつた私はそれを読んで、坐つてをられなかつたくらゐに興奮した。それは「山椒魚」といふ作品であつた。／太宰氏は、埋れた無名不遇の天才を発見したと思ひ興奮したといつてゐるが、併し、太宰少年は、無意識に、その作品中の山椒魚を自身になぞらへて興奮したのではあるまいか。／ところで私は、太宰氏を、その山椒魚と考へるよりも、寧ろ井伏氏の他の作品「屋根の上のサワン」のサワンになぞらへたい。もつともサワンにされるのは厭だらう。あくまで、山椒魚を怙恃したいだらうと思ふ。(それは当然なことだ) 併しながら、われわれ読者はサワン説を固持する。すなわち、「サワン」は太宰氏であり、作中の「私」は、われわれ読者であつたにちがひない。併し、自由に憧れるサワンは、何時までも、私たちとあなかつた「サワン、サワンはゐないか。ゐるならば出て来てくれ! どうか頼む。出て来い!」／水底には植物の朽ちた葉が沈んでゐて、サワンは決してここにもゐないことが判明しました。おそらく彼は、彼の僚友達の翼に抱えられた、彼の季節むきの旅行に出て行つてしまつたのでありませう。(井

伏氏「屋根上のサワン」／サワンは逃げた。何故に逃げたか。その理由を、もつともよく知つてゐるのは誰であらうか。サワンであらうか。「私」であらうか。それとも、空の星であらうか。太宰氏も、逃げてしまつた。この理由を、もつともよく知るのは誰であらうか。——私は知らない。ただ、私をはじめにあげた「富士百景」の序文を、しみじみと思ひ出すのである。

〔付記〕 末尾に「昭和二十二年、晩秋。」とある。なお、『屋根の上のサワン』井伏鱒二選集第一巻』は、「昭和二十三年三月二十日印刷」。「著者井伏鱒二」「発行者古田晁／東京都文京区台町九」「印刷者中内佐光／東京都千代田区飯田町一ノ二三」「発行所株式会社筑摩書房／東京都文京区台町九」で、「朽助のゐる谷間」(55頁)、「炭鉱地帯病院」(54頁)、「山椒魚」(69頁)、「埋憂記」(82頁)、「休憩時間」(114頁)、「シグレ島叙景」(128頁)、「鯉」(159頁)、「生きたいといふ」(168頁)、「遅い訪問」(174頁)、「寒山拾得」(194頁)、「夜ふけと梅の花」(206頁)、「屋根の上のサワン」(229頁)、「谷間」(240頁)の諸篇が収載されている。

女類・八雲・四月号、新編集第一号、第三卷第四号・昭和二十三年四月一日発行・58頁・64頁・「短篇」欄

『桜桃』(実業之日本社、昭和二十三年七月二十五日発行)に、全文収載された。

『太宰治全集第十五卷人間失格』(八雲書店、昭和二十四年十二月十日発行)に、全文収載された。

〔同時代評〕 野平健一「如是我聞と太宰治」(『新潮』第四十五卷第六号、

昭和二十三年六月一日発行)には、つぎのように記されている。

「この前、原稿料をとりに、寄つてくれたらしいね。君だ、といふことを言はないから、……あのときも、ここにみたんだよ。」／私は、いま有名の女を、妙な女だと思ひ、「女類」(八雲、創刊号)といふ、小説を、ちらと思ひ浮べて、笑ひがこみあげてきた。／「家の近くで、女房にみつかつたよ。すぐ近くまで、こつちは二人とも近眼だから、気がつかなくなつたんだ、あとで女房に、さう云はれた。あの女のひとはどなたですと言つてたけれど、あのとき二人の間は、一間位はなれてゐたから、おれは知らない」と云つた。女房の方で、気づいて、直ぐまがつてくれたらしいね。」／さうして、女が買ひものから帰つてくると、「おれの女房は、やつぱり気品があるね。このひとつとは、ちがふな。」と私に言はれるので私は誰の顔も見ずに、うなづいた。

〔付記〕 初出誌は、「昭和二十三年三月廿五日印刷納本」「編集人橋本晴介」「発行人中村梧一郎」「発行所／東京都文京区森川町一一一／株式会社八雲書店」で、岸田国土「〈長篇〉善魔」、太宰治「〈短篇〉女類」、石坂洋次郎「〈長篇〉燃ゆる雪」の諸作が掲載されている。

渡り鳥・群像・四月号、創作特集、第三巻第四号・昭和二十三年四月一日発行・5～11頁・「創作」欄

『桜桃』(実業之日本社、昭和二十三年七月二十五日発行)に、全文収載された。

『太宰治全集第十五巻人間失格』(八雲書店、昭和二十四年十二月十日発行)に、全文収載された。

〔同時代評〕 豊田三郎「創作月評―群像―」(「文芸時代」第一巻第五号、

昭和二十三年五月一日発行)には、つぎのように記されている。

渡り鳥(太宰治) 太宰氏は八雲にも、「女類」といふ短篇を書いてゐる。この人は大変短篇が上手である。「悪い材料は捨て、本当に面白いところだけ選んで差し上げてゐる」といふのはこんな作品であらう。全くこれはあまり腹の足しにはならないが生きのい、ところやピリッと辛子のきいたあたりを味ふ、つまみものみたいなものだから、心の中でこつそり、おいしいなとつぶやいて引さがるよりほかない。二つの作品では、「女類」のはうに齒ごたへがある。太宰治氏の女性観に貴重な資料を加へたものだ。

〔付記〕 エピグラフに「おもてには快樂けらくをよそひ、心には悩みわづらふ。／――ダンテ・アリギエリ」とある。初出誌「編集手帖」には、つぎのような記述が見られる。

本号は太宰、上林、榊山三氏の短篇に、丹羽氏の長篇第七回を配して、創作特集とした。冬々独自の風格を持つ中堅作家の力作と共に、特記したいことは、エドモンド・ブランデン氏から詩の寄稿を受けた一事である。

なお、初出誌は、「編集兼発行人高橋清次」「発行所／東京都文京区音羽町三丁目十九番地／株式会社大日本雄弁会講談社」で、印刷納本日の記事はない。同誌「創作」欄には、太宰治「渡り鳥」、上林暁「小さな蠣瀬川のほとり」、エドモンド・ブランデン西脇順三郎訳「港のスケッチ(詩)」、榊山潤「蜂」、丹羽文雄「哭壁(長篇第七回)」などの諸作が掲載されている。

徒黨について・文芸時代・四月号、第一巻第四号・昭和二十三年四月一

日発行・2〜3頁

『如是我聞』（新潮社、昭和二十三年十一月十日発行）に、全文収載された。

『太宰治全集第十六巻もの思ふ葦（近代文庫23）』（創芸社、昭和二十七年七月一日発行）に、全文収載された。

〔付記〕 初出誌は、「昭和二十三年三月二十三日印刷納本」「編集人西大助」「発行人松崎正」「発行所／東京都中央区日本橋通二ノ二山邑ビル／株式会社新世代社」である。

櫻桃・世界・五月号、第二十九号・昭和二十三年五月一日発行・60〜64頁・「創作」欄

『櫻桃』（実業之日本社、昭和二十三年七月二十五日発行）に、全文収載された。

『現代文学代表作全集第四巻』（万里閣、昭和二十四年一月二十五日発行）に、全文収載された。

『日本小説代表作全集18昭和二十三年前半期』（小山書店、昭和二十四年二月十五日発行）に、全文収載された。

『グッド・バイ』（八雲書店、昭和二十四年六月十五日発行）に、全文収載された。

『きりぎりす（筑摩選書25）』（筑摩書房、昭和二十四年六月三十日発行）に、全文収載された。

『太宰治全集第十五巻人間失格』（八雲書店、昭和二十四年十二月十日発行）に、全文収載された。

〔同時代評〕 野平健一「如是我聞と太宰治」（『新潮』第四十五巻第六号、

昭和二十三年六月一日発行）には、つぎのように記されている。

日を隔てて、稿料を届けに行つた私の前に、黙つてぱいと、一どちの原稿が投げられた。桜桃（世界五月号）である。読み終つた私は、茫然、涙ぐみ、じつと、太宰さんの顔を見上げるだけで、いつものことではあるが、このときは殊に当惑を極め、狼狽を感じた。／「どうだい。」／「え、。」／「なにも言へぬえのか。しやうがねえなア。」

／私は「桜桃」を亘らすやうに、太宰さんの膝下に返したのであるが、そのとき一角に声あり、手を差し出して、／「どおれ、私にみせて。」／「へつ、何でも眼を通さうと思つてやがる。小説なんてわからねくせに。」と太宰さんは女に向つて言ひ、さらに私に向ひ、／「なあノヒラ、見せたらいけないな。見せないほうがいいだらう。」／「いけないですね。」／私は、太宰さんの前で、始めてはきはき答え、溜飲をさげる思ひであつたが、いま有名の女性の手は傍若無人、ためらひなく「桜桃」をかすめ取つた。暴力には無抵抗、べそかいて、唇をかむ。／私は、遺憾の意余つて、飛びか、りたい衝動を感じたが、実行するには、内外共々距離の遠さに身がふるへ、さうしてあきらめた。／私は、太宰さんの将来のある作品の題名が、「桜桃」であらうなどと、大それた予言の才を持たぬ。けれども「ある作品」を予想することは、至難の業といふわけではなかつた。いつか、いつか、きつと現はれる。「ある作品」太宰さんの机上の原稿用紙の空いた罫目をいつか埋める。「ある作品」余計なことかも知れぬが、私は「ある作品」の活字に現はれる、「いつか」といふものを、タブウの如くおそれてゐた。その周囲を低迷、顎をつまんで退却してゐた。まぎれもなく、タブウで

ある。私は太宰さんの自宅に伺ふたびに、タブウタブウと思つてゐた。度を超えた親切、鄭重すぎるお世辞、これがタブウに向けられるならば、つらい悲しいの段ではない、ヒサンであらう。タブウとは、善意といへど、近づいてはならぬの意。ひと知るや否や。／もし仮に、ひと知れず、一家内にタブウがあれば、それに近づき得るのは、あるじだけ、それだけであらう。／あるじは家内故に、一そ、聲ひそめ、息をこらしてタブウに歩みより、鍵落して扉を開く。「たゞ山に向いて、目を挙ぐ」の情。さうしてつひに、「ある作品」の出現。／即ち「桜桃」。

／私は太宰さんを、自宅まで送りとけねば、気が安まらなかつた。／ネーヴルをか、へた女も、お宅の附近までついてきた。／酔を全身にのこしてゐる太宰さんは、背をまるめ、ズボンのポケットに両手をつ、こみ、川べりを、蹠^{ツツ}、右に傾き、左へ寄り、無言で歩み、家路に向ふ。／玄關を開くなり、／「ノヒラ君のところへ、仕事をした。」

／最後の長篇「人間失格」のため、太宰さんは熱海行。「桜桃」の風景は移らぬ。思ひ余つて、／「ノヒラ君、だれか手伝ひの、おばあさんでもないかしら。みつめてくれないか。……駄目かも知れないなア。誰が来たつて、女房は直ぐに帰してしまふんだから。」／私は、言ひたいことがあるのだけれども、度の過ぎた親切を見せることが、相手が太宰さんだからためらはずにはゐられなかつた。

石川淳「太宰治昇天」(「新潮」第四十五卷第七号、昭和二十三年七月一日発行)には、つぎのように記されている。

つぎはやはり去年の夏、これが最後の出会いになつた。ビールをのみながら、歓談であつた。そのとき、わたしが「われわれのことを自虐

だなんていふやつがあるけれども、自虐つて何だね。自分を虐待するなんて、かんがへてみたこともない。われわれはするぶん自分を甘やかしてはうだらう。きみなんか、さうぢやないかね。」といふと、太宰君はふむ、ふむと、笑つてゐた。そして、この歓談のあひだ、太宰君はいくたびとなく、並んでかけてゐるわたしの腿をつねつた。それが話の合の手やうに、またはなにかの合図のやうに、わけもきつかけもなく、つねる。その席にはほかのひとたちもゐたが、たれも気がつかない。わたしは酔つたせゐか、とくに痛いとも感じなかつたので、だまつてゐたが、家にかへつてみると、青いアザができてゐた。どうして太宰君がかうつねつたのか、いまだに判らない。今おもへば、この夏といふのは、作品「桜桃」の季節に対応するやうな夏であつたらしい。すると、太宰君はこの席上でもやはり「家庭に在る時ばかりでなく、私は人に接する時でも、心がどんなにつらくても、からだがどんなに苦しくても、ほとんど必死で、楽しい雰囲気を作る事に努力」してゐたのであらうか。そして、われわれと別れたのち、「私は疲労によるめき、お金の事、道徳の事、自殺の事を考へ」たのであらうか。さうすれば、われわれは太宰君からその「悲しい時」にかへつて、「おいしい奉仕」を受けたことになる。またさうとすれば、わたしはいよいよこの「通人」の父」を呼ぶに軽佻なる「自虐家」の称をもつてすることのはなはだ当らざることをおもふ。太宰君の「心に悩みわづらふ」所以のものは、必ずや神姿清澄、その状とんと「自虐」の泥くささには似なかつたにちがひない。わたしはただ力およばず、一夕の「おいしい奉仕」の返礼として、もつと無粋に「自殺」の邪魔をして

やれなかつたことを残念におもふ。／（略）／「人間が、人間に奉仕するといふのは、悪い事であらうか。もつたいぶつて、なかなか笑はぬといふのは、善い事であらうか。」（桜桃）／かういふ質問の出し方に於て、太宰君は「必死」であつた。近作の中にしばしば使はれてゐる「必死」といふことは修辭ではなかつた。事は日常の瑣事に似る。しかし、善と悪との対決に於て死を決するに至つたものの發言である。

ここでは、善と悪とはもはや觀念上の対立にはとどまらない。行住坐臥、事の大小を問はず、常に善生活か悪生活を決定すべき契機に乗りあげたところの、人間生理がここにある。ただし、芸術家の死を決すべき場所である。／（略）／ところで、太宰君にとつては、すべての調和は妥協であつた。生理上に於ける善生活と悪生活との対決には、調和の一点は無いはずだからである。このとき、太宰君はどこに立つて、いかなる仕方でも、發言し主張するか。われわれは太宰君みづからのことばに聴かなくてはならない。／「書くのがつらくて、ヤケ酒に救ひを求め。ヤケ酒といふのは、自分の思つてゐることを主張できない、もどつかしさ、いまいまして飲む酒の事である。いつでも、自分の思つてゐることをハッキリ主張できるひとは、ヤケ酒なんか飲まない。」（桜桃）／「自分の思つてゐること」とは何か。ひとりひそかに「お金の事、道徳の事、自殺の事を考へる。」といふ。こちらの耳のあやまりか、わたしにはこれが「生活のこと、善悪のこと、主張のこと」といつてゐるやうに聞える。臆測するに、「自殺」の意志とは主張の意志である。「私は議論をして、勝つたためしが無い。必ず負けるのである。」といふ。さういふ太宰君にとつて、「自殺」はそれ

が敗北としか見えないやうな強引な究極の勝負手であつた。すなはち、狐独なる芸術家の最後の自己主張であつた。何を主張するか。ここに至つては、善生活はかくあるべしと主張するほかに何も無いはずである。そして、「自殺」を目前にして、「もどつかしさ、いまいまして」をたたきつけた文字は、太宰君ほどの文才をもつてして、なほ俗眼にはあたかも表現上の「ヤケ酒」かと誤解されるやうな痛烈なる形式をとつた。その形式の上に太宰君は身ぐるみなだれ落ちた。

伊馬春部「美しき犠牲を―太宰治を悲しむ」（『新小説』第三卷第八号、昭和二十三年八月一日發行）には、つぎのように記されている。

比較的最近作の『桜桃』（世界二三年五月）の中の、／子供が三人。父は家事には全然、無能である。蒲団さへ自分で上げない。さうして、たゞもう馬鹿げた冗談ばかり言つてゐる。配給だの、登録だの、そんな事は何も知らない。全然、宿屋住ひでもしているやうな形。來客。饗応。仕事部屋にお弁当を持つて、出かけて、それつきり一週間も御帰宅にならない事もある。／この宿屋住ひといふことばも、痛いほど私の身にしむ。／戦争中からさうだつたが、戦後、津軽から帰つて來ると仕事部屋をもうけて、いよいよ家に居つかなくなつてゐた。私への便りにも、面会の場所は仕事部屋の近くやなじみのうなぎ屋などを指定して來るやうになつた。彼の爐辺の幸福を願ふこと切なるもの、ある私は、家にも寄らずさういふ場所でも彼に会ふのは何か後めたたく、お子さんたちへのものなどを彼にことづけずにはゐられない気持ちだつたが、さういふことをする私は、彼はきつと戸まどひする思ひで私を憎んだりしなかつたらうかとおもふ。しまひには怒つて、彼一流の

キザだといふ観念に私をぶちこんではしまひはしなかつたらうか。せつかく宗吾郎の子別れを演じて来たものを、しかもそれを忘れ去つてゐる頃に、演じる前の切ない愛情に瞬間ひき戻してしまふ私を、内心おこつたかもしれない。／さういふ心の動揺は、彼の眉の表情などから私にもすぐびんと伝はりはするのだつたが、私は敢へて無視した態度に出ることが多かつた。怖いひとだと或人に私のことを洩らしたことがあるといふから、私のその態度を彼もまた気づいてゐたにちがひない。／しかし平凡な私には、子供より親が大事といふ彼の生活態度は、なにか人なみすぐれた偉さに思はれたのである。玄関をあければすぐ六畳の荒れ果てた家、唐紙も障子も破れ放題なら、床の間には蜜柑箱が重なつて無造作に本などが突つこんである……そんな風景にむしろ私はつねに厳肅なものを感じさせられてゐたのだ。世間なみのきちんとした生活法が気耻しくなるほどのたたまひは、つねに私には彼の偉大さを感じさせるよすがとよりしかならなかつた。／だが、彼は、『桜桃』の中で、かうも言つてゐる。／……子供が夜中に、へんな咳一つしてもきつと眼がさめて、たまらない気持になる。もう少し、ましな家に引越して、お前や子供たちをよるこばせてあげたくてならぬが、しかし、おれには、どうしてもそこまで手が廻らないのだ。これでもう精一ばいなのだ。おれだつて、兇暴な魔物ではない。妻子を見殺しにして平然といふやうな「度胸」を持つてはゐないのだ。配給や登録の事だつて、知らないのではない、知るひまが無いのだ。……また——、／私は家庭に在つては、いつも冗談を言つてゐる。それこそ「心には悩みわづらふ」事の多いゆゑに、「おもてには快樂」を

よそはざるを得ない、とでも言はうかいや、家庭に在る時ばかりでなく、私は人に接する時でも、心がどんなにつらくても、からだがかんりに苦しくても、ほとんど必死で、楽しい秀麗氣を創る事に努力する。さうして、客とわかれた後、私は疲労によるめき、お金の事、道德の事、自殺の事を考へる。……／それから『父』にも、発表当時から私の心にぐさと刺さつてゐて、彼にもあんな悲しいことはもう書いてくれるなど言つてやつた、一節がある。／（略）／「親が有るから子は育たぬ」だの「子より親が大事だ」のと矛盾をたのしむやうなことはせず、なぜもつと徹底的に犠牲をつくる心になつてくれなかつたらうか。一人の人間が太陽の如く輝くかげには、そのための犠牲がゐてもいいではないか。むしろそれは当然なのだ。そしてそれらの犠牲たちは、その人間が太陽の如く輝けば輝くほど、ひそやかに誇りあひ、犠牲たちそのものも、美しくかゝやいてくるに違ひないのである。／彼はもつと大膽に、顧慮なく、多くの美しき犠牲者たちをつくるべきであつた。さうして彼も、もつともつと偉大になるべきであつた。／私がかう痛恨するとともに、彼をしてこのやうに自己をさいなむに到らしめた、旧道德を憎むものである。その、それこそ封建的ともいつてよい旧時代の道德観念は、仕事部屋を他所に設けなくてはむくらの安住の家をすらこの作家に与へることを阻んでゐたのである。／そしてこのことこそが彼の悲劇の最大の原因であつたやうに、私は考へる。

青山光二「白い手」(「文芸時代」第一巻第八号「太宰治追悼特集号」昭和二十三年八月一日発行)には、つぎのように記されている。

太宰氏がだいに死へ向つて歩いてゐた事は、文学を業とする者の間では、殊にある範圍の者の間ではかなりはつきりと感知されてゐたのではなかつたらうか。そしてともと死と隣り合はせて仕事してゐた文学者ではあつたけれど、『ヴィヨンの妻』『おさん』と近來にはかに仕事の上に死の翳が濃くなりまさり、『斜陽』に総決算のけはひ否みがたく、さらに「世界」五月号の『桜桃』にいたつては、あまりにもむき出しに、遂ひ詰められた作者の位置がいたいたしく血を噴いてゐた。今までにかつて無く表現が気短かであつた。辛うじて「桜桃」といふオチだけが、何とも儀礼正しい職業意識の乃至は良識の哀しさなのであつた。たうとう此処まで……、そんな感じであつた。むろん我ら、他人事ではないだけに、爾來死の報知のあるまでの数日間、思へば悪夢の様にこの作品は私につきまといつて離れなかつた。

正宗白鳥、上林暁、中村光夫「創作合評（十六回）」（「群像」第三卷第八号、昭和二十三年八月一日発行）には、つぎのように記されてゐる。

上林 今度、読んだ中では、太宰君の「人間失格」（展望六月）が、僕はページのないなるのを惜しんだというほどではないけれども、釣られて読みました。／**正宗** やはり、太宰という人の短い「桜桃」（世界五月）というようなものは、ちよつと読むとずつとひかれて読めた。そのほかの人のでも、筆の慣れた人のはすぐ読める。読んだあとでの面白いが、面白くないかは別だが……。それはむずかしいのでも、それが我慢して読んで味の出るものもある。初めとつつきが悪くて、しかし、我慢して読んでると、筆の非常に幼稚なところがあるにしても、

そこに何かこつちの心をうがつものがあるということもあるのです。一概に言えないが……。／**中村** 上林さん、太宰君は一種の私小説作家ですね。ああいう太宰流の私小説はどう思いますか。／**上林** あの人の私生活と、あの人の書くものと、どこまで密着しておるかということは、僕は疑問に思つてゐるが、悪く言えば、少しべてんにかけられたような感じがする点もある。そこがまた面白いけれども……。

小田切進「太宰治の死とその文学」（「文学時標」第五号、昭和二十三年八月二十五日発行）には、つぎのように記されている。

「桜桃」の「心には悩みわづらふ事の多いゆゑに、おもてには快楽をよそはざるを得ない」主人公の「必死な努力」は、ついに「生きる」といふ事は、たいへんな事だ。あちこちから鎖がからまつてゐて少しでも動くと、血が噴き出す」と感じ、「もう仕事どころではない。自殺の事はかり考へてゐる」ということにまでいたるのだつた。／固定された自己の世界は、見果てぬ夢を现实生活において崩されたりまた打ち建てようとするたたかいに自ら身を破つてゆくことがなく、そこにもはや作家と作品の本質的な発展など求むべくもないのであつた。

〔付記〕 エピグラフに「われ、山にむかひて、目を挙ぐ。／——詩篇、第二百二十一。」とあり、初出の末尾には、「——カット、曾宮一念——」とある。初出誌は、「編輯兼発行者吉野源三郎」「発行所東京都千代田区神田一ツ橋2ノ3岩波書店」で、印刷納本日は記載されていない。目次には、「（創作）桜桃……太宰治」とあり、「創作」はこの一篇だけである。

如是我聞（二）・新潮・五月号、第四十五卷第五号・昭和二十三年五月

一日発行・16頁21頁

翻印状況については、以下、「如是我聞(四)」まで、「如是我聞」の項を参照のこと。

〔同時代評〕 以下、「如是我聞(四)」まで、「如是我聞」の項を参照のこと。

〔付記〕 初出誌「目次」には「如是我聞(二)」とある。なお、初出誌は、「昭和廿三年四月廿八日印刷納本」「編集兼発行者斎藤十一」「発行所／東京都新宿区矢来町七一／株式会社新潮社」である。

〔追記〕 この稿を草するに際し、つぎの諸氏、諸図書館、諸社の協力を得た。記して深く謝意を表す。小野正文氏、肥田皓三氏、森永国男氏、日本近代文学館、弘前大学附属図書館、家の光協会、光文社。

原稿受理一九八五年九月十七日